

古
き
/
ト

昭和元年迄の断片

此書 昭和元年王様御集

延一
千四百三十五番地

井田 谷雄一

龍隆明ノミナ

才二

まゝ書きし一書に二書にわかれ

たゞ一書は書かれず其指目なり

これに三つ下の腰紙をすゝぬ及指目なり

書冊を付まつに付しなり其指目なり

書きし書にうたふなり

わし書きたるは他の書に比し其指目なり一書に新書なり

書目、書目なり一書に二書にわかれ

まゝ書きたるは他の書に比し其指目なり一書に新書なり

書目、書目なり一書に二書にわかれ

書目、書目なり一書に二書にわかれ

書目、書目なり一書に二書にわかれ

才二

まゝ書きたるは他の書に比し其指目なり一書に新書なり

書目、書目なり一書に二書にわかれ

書目、書目なり一書に二書にわかれ

書目、書目なり一書に二書にわかれ

書目、書目なり一書に二書にわかれ

書目、書目なり一書に二書にわかれ

劇一作 戯曲

第一幕

登場人物

増村 比呂子 豊田 幸四郎

吉村 現年 百六十二歳

人物

主人 吉村 二十五年前の事

女主人 一人

主人の伯父 五十歳

つ 終年

主人の友人

昔の五人の物語

村一房

市川 花菱

新巻川 二つと知り 下 一回 (二巻) は新巻に

左の一回目上段に 村一房に

字書は 中巻に 豊田幸四郎 主人 吉村 現年 百六十二歳

増村 比呂子 豊田 幸四郎

左側の 二巻に 田舎人

(二) 七巻に 増村 比呂子 豊田 幸四郎 主人 吉村 現年 百六十二歳

元金すきき

他の一巻

本巻に 増村 比呂子 豊田 幸四郎

主人 吉村 二十五年前の事

女主人 一人

主人の伯父 五十歳

つ 終年

主人の友人

昔の五人の物語

此 蠟

星月も月も光 とききつて二重うまへて 和はれにたふさぐ

言書てぬり夜ひて 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

一なり 蠟父

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

和はれにたふさぐ 和はれにたふさぐ

下醫席は 糞丸 痔瘻 毒丸 芥子 みの びも 中へ 中へ 前に 合へ

此はもう腹を吐き出す諍いである
 文政の元氣々々　この年こそ一に此器に近づく博士の年の世
 此の重寶にシてこた
 せいも一番盛あれたのは、分後丁蔵師の所であつた
 裏に用ゐるといふと、同じ二井しかた　一割、模範は、あるが
 言うゝ主人が習ちた
 打止り丁蔵堂より、横七也同〜等した

何びす
た聲に
丁隠り事業のこころをわたり創をみく

張念如子 和はこ 五の才也

にんく

白り文の 言葉に 驚く事ある 此の二人の 白きに
来り事なきも 亦こ生文の 眼を 風はいた

はーもろぢやない 言ふより人に人になつてうこそぢやない
 和はむろちやない この言ふより人に人になつてうこそぢやない

下 廣所の 宿の 貝。 孝安人 右。 けりし人 右。 九

然は、いすゝもあぬのしちつに而して、
喜こむに、
あらう。ねふた。それにも、栗の考へは、と
きわめられ

[illegible]

佐財をいふこと
なり傳へば 有 甚 疾 病 に 令 い て 佐 財 の 用 意 を も っ て
休むはうとて 妻の 病 愈 び ち の を 去 る 人 な
妻は共いなるに 眠る用こ

中切
新うた
方い
こくわー
下
ちん
あうた
あう

[illegible]

彼は
 隠るに
 其聲を
 言はるに
 古めし
 けう
 乙乙

無うなチね
 唯
 ぬーたり
 遠乎、一々
 結必に
 カ
 甘牛花
 牛一頭
 の牛を
 環
 抱
 二
 三
 した

はな 目い、
すき なめうた
来日 吾が 氣に、
彼等 言ふと云ふに

二方ふたこりこ
言ふ(思)ふん
す
すをやりこへ

ワウ

有在左ノ傍ニ
之ニテ居ルナリ

結、日
一
襖
1
左
5
博士
上
12
わ
、
あ
、

肥、左、左、身、左、

人、
其の
うに
上
を

[illegible]

抄上
以
總
博
考
同
考
分
一
同
之
考
之
考
見
考
博
考
考
考

其 上ニ
下
来たり
言ふ
言ふ
来たり
来たり

中
中
博
七
心
居
心
た
の
を
同
じ
く
登
録
し
て

わー
りきさん
いさ

松子
松子
松子
松子

[illegible][illegible][illegible][illegible]

情にほく聲が重なり
ふふ女の雪をまきだした

博七は併の併のちも
書 併のちも
一 併のちも

月も不考なり
飲るるも思ふ
（毫の二三）

余り事如月と云ふ事なり

此は言ひは一方のみ用ひて思ふた

一別々
フー

博士の事として言ふ事は、
一國といふこと
博士の力に等やせしむ

魯

下巻師に乞ふと著古くは女言物と所傳に今いた
は山良を兼う雪土の上やに真の序表をすこした
分の交毛抱こす

オムンクーのこまうめうた手新字に
食を(軍)に言へ
意中つた其と言ふは其耳に
寫意を物書りナリ有
す無す十種の力及て其ナリ
様や物言に其の角の一角に
刻み付くやうな

彼の親王を色を注ぎし貴族は、
 彼を討ちたむ。

おなな
に
十
リつちやのやち
つちやの
やち

東の虎勢耳はオノマス 休の回おあゝあゝあゝ いた身にふりあゝ
 七く 一し 小梅を舞ふ 水 持たにたい 魚 多いこ 虎 心 茂を
 虎々勢 碩大なきを 金バヤイ かりとと 勢 されと 虎

わしうた 節し 歌々 金草 大友になつて来
心のすへ 死ぬもんか 死ぬもんか おやいた

はが妻の側に立つて良のオネのきんをいかにするをきかす

紋は多様にして其の地に
 三十分の二に碁にさう
 なるに
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

結は夏の下、暖か
 もいやく果てたといふが下。筆師の言ひ
 かノありたるより半精目には手折せぬ方々
 あり。彼は登布ク要だ。之を今人を求てて
 左の

村山に
電
へ
4時
から
た

下丁醫部文手術卷九

(七) 長谷の地所り考が来た。奈良五丁

用立はちうと事た
者様は妻の毛布(乞)のこー

とす
嘉右衛門
更々
其子に
ゆゑ
言ふ
所あり

下
後山
共了し
摩ふ
如
塔の
心た
紋い
つて
昔下
怪中

見方卷一

打山は書下書着に方つきえうちたぬうた

老花
一
手
一
是
一
馬
三
二

3 1 4 2 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

糸 22 2 2

アラスカの外の白く 肩を つつん やうな
ほのめは 生みだれも 今と位 釋名に 半は 用まふけた 物
サラン 仁の 種々 等々 總て 我の 身や

はの 女の 顔を見守る (おれも 解き) 是は 志を 無情に なく 未言は

目まやう 眼を つみ した 不し 眼を ちみ した 有て かつた 目と 寄
て 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
めたりや スーモ 是の 目と 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄
つみ 眼を ちみ した 思ふ 是は 遠い 寄て かつた 目と 寄

誤診

短
かり
秋
の日は
何す
へも
無し
過ぎ
やう
うーた

薄
脂
電
燈

煖進之介 白舞事のホシ。子々時々

和女之言曰は交ふと来た

二
三
變
江戸
鍵
手
を
泡
はし
見
た
し
ふ
し
開
き
か
み
う
ち

雪水あり、立つて雪のにふみたりく、雪なり

起
 来
 一
 池
 三
 乃
 軍
 乙
 へ
 太

外
唐七片
手₁₂
抱₂
手₃
彼₄
見₅
方₆
方₇
妻₈
は₉
宵₁₀
夜₁₁
の₁₂
雲₁₃
一₁₄

[illegible]

恩
に
あ
る

乙 附
 け 加
 へ へ
 裏 の 顔
 七 七
 是 是
 在 在
 裏 は
 征 の 気
 持 持
 か か
 く く

顏如左
右
左
右
左
右

思
つ
た
か
3
1

あ
ま
た
の
し
し
し

まゝ
十二等
一
小聲
言へ
龍文
千尋の

體之思之位

はは 勢りやうに力屋
揮ー 74~ 1言、1言

其
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

轉彼も雨も 式之に 歸つたに 隨か合つた 新故を 述べ

新故を 述べ 彼等には 事あるが 徒然も 女天 吾等が 皆と一 人より 事。 今と 必す

一 事は 事 故に 女と 是れ 幼の 短身 生後 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

今と こと ありて 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて 或は こと あり 是れ あり 事 故の 事 年々 の こと ありて

は あり

短歌

酒に酔ふ

彼女の前身は運命のつもの梅に雪のしずく

作りぬはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

はつめはまきこに葉の某もこゝろ運命の

夜，幕。

天
使
白
鳩
を
飛
ば
し

赤雲は海へ沈け
夜は幕は下りて

南 ~~東~~ 屋 一 の 序 其 二 なり

乙女の
服は
踊りに
狂ふた

物は皆は無心で動く

子
葉
子
の
如
く

けう
 望
 雲
 眠
 天
 糸
 聲
 音

聲こゝろ
に
望め
—
~~林葉~~

痛
 痛
 痛
 痛
 痛

果は 重 格外

世は沈黙の年々
情熱の身々燦々

東渡

清
空
反
能
體

な
り
に
し

外
は
一
部

和
は
郷
~~カ~~
カ
に
11
12
6

ハ
其
の
席
は
刻
を
失
て

まに／＼ 別は／＼ 序と減あり

半用ノ交ヲ善ク回ニ急ムハ

赤血のわさず
 心のわさは
 こゝろをさす

や
あ
こ
の
理
想
を
持
つ
女
子

其
其
其
胎
同
生
造
は
~~考~~
考
の
だ

其日其夜其臨

$\frac{1}{2}$ 生 1 生 12

廿五 薛日中 仁本

475

昨日佛之
昨夜大寒
日食
腹痛
在
一
方
二

70
7
1.0
7
街

あゝ 雪の
た
や
べ
の
樹

柳の枝にまゝに
たゞのまゝに
葉末に

4.4
12
4.4
4.4

牛
ク
夜
の
産
子
心

若
 の
 若
 の
 思
 を
 し
 の
 の

人
や
早
貴

家へ来た
新
事
生

事
中
に
お
け
る
諸
君
の
事

或時以道女夫く見ふ

或等はく
わすに
世に

坂を
 下。
 めこ
 思へ
 坂を
 上
 つ
 へ

左に
見
左に
より

たう
てにエリ
の

其書
書に
上
上
事
事

其意に上む。事は

悲
道
路
息

悲道悲道息息

水セウヲ

船
は
か
し
バ
ノ
私
呼
ぶ
に
事

人生の道路を

事之
事之
事之
事之

卷之三

實聲より花の一夜空は晴れにやん

○ 27

善し
又 稗
意
意
明
う

重刊

३२

店
ー
め
フ
ン
か
ま
く
な

文
コ
ヤ

物
う

今度は先づ果てて
~~書き~~ 和へす

卷之六

毛素芬 和 和 和 和

7
3
—
,
~
日
f
—
—

裁
象
ぶ
人
言
ふ
に
し
に

か
た
な
く

い
は
ま
な
く

か
こ
た
た
ハ
ハ
ハ
ハ

Hold me close and keep me warm
Out of the darkness, safe from the storm—
Fields are dead 'neath the crackling frost,
Trees and hedges like rags are tost.
Oh, draw to the fire and tell me a tale
That will drown the whimper and cry of the gale.
Sing me of Spring and burgeoning flowers,
Sing of langorous scented hours,
Sing me of people out of the cold,
Sing me the song that never grows old,
Sing me of cottage and homing dove,
Sing me the lilting brave song of love.

此は かりうんぬん べんやう 派の功利主義をキリキリと 現政を論ずる。
 汝は 富貴や 一つ 社会の 觀念の ことを 考へ 考へ 所 善道の 道徳の
 様な 觀念の 如きもの 有 世に 備へ 備へ 所 善道の 道徳の 如きもの 有
 社会の 備へ 備へ 所 善道の 道徳の 如きもの 有

7

人々の幸福を修身の規則の訓令を以て
 人生の目的とする。

秘の考より甚礎におた意見の大分方一
言叙上の懷疑主義、功判主義、境説又
民主主義、俗理又出厚済安は何等の重大意義を
有す。事——に強く反對し予々事柄にいふに

カ
ー
ラ
ン
が
7

自由の名は人々に美しきとも其の爲に此の世の民の
死に成るは終りなきは塵土の敗靜に呼ぶれ卑怯者
呼ぶるも生命の有難さにオブリッ〜行く方の幸福あり

てゝ賢明なる人権の支配を永久に是な爲の上に特權を
持つことを認めたいのである。

勞働問題に於て所謂「過労主義」なる
點を明かにし、資本家の利己的な信念を
指導するもの、アクトを認めたものなり。

カ
ー
ラ
ン

思邈所傳千世主壽

白主主義
讀秀若
一テロラー大の
化に大ク
信仰者と
おったのである

富の平等一
部の人の物質的
~~権~~権力の増大、
此等には

富の公平等 一部の物質的權 權力の増大に對す
一般人民の 憎悪 一三三の改革運動の起つた時
に當り 著しく 理の社會主義が未來の進歩的思
象の中核となつた 個人主義に對つて 物質的
的權を求めたものである

今 携て 杖ぬゝ 事たのいふ

ETHEL MEADE LILLE.

力ーうん 夫の結婚の生戻り
生 凭りおつた 時に傷
も 結婚の女は 良く 耐へた

静 巻 一 古 本 七
 夫人より 夫に 運 入

鳴呼 夫よ 段々
病は おなたの 赤い
詩に 悔しく候 赤い
好いよ 好まう 赤い
即ち 之より 其の
お

カールスの夫人に對す
よこ新井後妻若
と同棲し居けり云々

妻の苦痛は針一
知る者ふたてふ
白に

秋の 妻は ぼろろによ
 を照し 秋には 何重
 新は 基 作に 余力
 思ふは 新に 秋

一、去年 四月二日
 カイロ バークに 乗つて
 船中へ 仰せに 倒す
 又馬車に 乗つたが 別
 カイロ 乗車に 乗つて 通り
 ガーランド夫人

こゝや あつた 吉野は 一言人 事々無、 自づから せまに 控、た

同は
煙草を
おちちの
と
嘉巴
かし
煙草を
おちちの
と
嘉巴
かし

公一 集 公 目次 故云 故云 公一

此
車の
廿五に
あり
あ
ち
て
け
ー
オ
一
た

そろふし
しめりぬまうが、無うと
事たせー院に
つるかじや言ふら

[illegible]

わさき方一やえ
言のろふ
な、い、ま、を、

仙宮の世より今の
銀君の
徳は
世より
長に

其の書は
ぬたに
まゝ

ち 山 金 よ 味 古 っ ち ち

[illegible][illegible]

佐下
し
し
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

言 山田 毫も 手
たき 大 十 手
シカ 形 左
新 左
ク 毛
ハ 思
ハ 思
ハ 思

[illegible]

山田 2

お
きり
ひ
ろ
す
な
ま

草 卷 五 之 九
 氣 計 七
 七 八 九
 十 一 二
 三 四 五
 六 七 八
 九 十 一
 二 三 四
 五 六 七
 八 九 十
 十一 十二

其
金

つや
い
や
無
う
か
(
お
た

金思白

[illegible]

十 幸 七 分 完 ^た 了 一 万 一 千 一 百 一 十 一 人

い
く
これ
オモ
ヤ
オモ
ふ
こ
こ
一
オ
つ
た

おれ等は
アイム・ユー・
カウ・ユ
カ

此本の中
には、今一
つ、この二

判り易く主として此の意の
爲め
利便を旨として

山田久平君に於ては、益々其の志を高くし、

世あふたむろゝと忍み
廿五いふあ

[illegible]

何だ 方、靴、手、人、女、一、カ、靴、顔、七、才、又、右、一、止、め、た

吾等が用きた世に在るよりたより少田
ツビニクヌサレテ、(合点)

[illegible]

おやし
とめ
たの
グ
上
め
た
人
の

久し人な
あま
山五
人件
何
う
長
の
ち

3
1
4
9
6
3
た
1
1
1

九月廿一

[illegible]

25

聲月ほふ子に

外方へ上

鐘
聲
子
乙

ゆるり

補

おた
たし

I am fond of you both and you.

其得

Chas. Smith. At court my dearest

John Leary-

inquire say & see you; then.

where are you? home

九十四

ask me you. Dear
 hope you know

Write me you always

Let us know how we agree

Let me know for some lovely

of in need of
C^o money for your necessities ~~for them~~

care down, care down, ~~down~~ the ~~to~~ your

Give me your love
Show your face in the ~~absence~~

adversary
darkly

Oh how ~~often~~^{often} lonely for you sleep

I should trust vote of love in your heart

~~The way~~ now
The way now might only be my life & my life

Love Well and when on your next
visit on your way I will still

Sept. 11 1882

The Second Generation

LOS ANGELES, Aug. 26.—[To the Editor of The Times:] The Japanese problem has been one of the outstanding questions in California for the last quarter of a century. The attention of the most Californians, however, has not been directed to the problem of the second generation of the oriental race. The issue of their second generation is becoming one of the vital problems not only for the Japanese residing in this State, but also for the sound-minded Americans.

There is a considerable number of American-born Japanese who have talent in art, scholarship and in leadership. But equal opportunities are denied them. The young Japanese are brought up and educated in American institutions of learning. The social influence overshadows that of a home and Japanese language schools. The Stars and Stripes impress them more deeply than the symbol of the Rising Sun. The horizontal writing is more natural and easier for them than vertical letters. They have American habits of thinking and American ideas and ideals. As a matter of fact, they are Americans in every sense of the word.

The problem might be less important if all of the Japanese children belong to the mediocre class. There are, however, many distinguished boys and girls. The writer knows that there were more than a dozen students who were chosen for the commencement speakers in the high schools of California this year. There were many instances when the announcement of a Japanese being so elected caused a regrettable trouble.

The occidental civilization comes into contact with the oriental culture on the Pacific shore of the United States. The circumstances compel the Californians to understand the oriental civilization and Asiatic races, if the world peace is to be maintained at all. The American citizens of the Japanese origin, if properly treated, will be the interpreters of the oriental culture to this country and the torch bearers of the international peace between this country and the Orient.

JAMES A. WRIGHT.

[illegible]

佐藤 君

行
之

金史

金七 持方

12 木

寺
、
小
乙

天
一
二
天
書

有也

得生
14
勤

人
の
手
の
ひ

た
3
1
世
3

傳傳

2
 72
 2
 4

水に

2012

告平左？
大

下. 12

あり
い
い

2

走
う
ま
の

山
12
16
3
5

三才
聖の

十數

右油產

夢中

3
左
3
十

リ

方
 五
 丁
 乙

3
書

27
77
41

浸淫

十白

升令其年有月日

降史の才手は、今日、
事定は、是、同、信、是、也、事、日、心、
言、舊、旧、月、七月、十日、
と、言、か、う、片、日、と、事、を、日、を、め、持、
（月、二十、日、）

此の年、是、日、に、降、や、才、二十、日、の、
是、其、事、の、事、加、め、た、事、を、
（月、二十、日、）

（い、か、た、
の、い、か、た、の、才、は、一、は、う、と、事、に、あ、ま、し、
の、い、か、た、は、や、し、に、あ、ま、し、に、あ、ま、し、）

八、人、ま、し、一、は、才、に、
日、中、日、く、百、二、
（月、二十、日、）

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

有、月、日

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

是、生、日、今日、は、僕、の、才、
（月、二十、日、）

夏より

夏に 顔を上り

夏の夕べの 燈籠の光

軒下の 雨の音

野人の 面影

夢の 残り

若人の 声

知く 答へ

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

夏の 夕べの 光

Why He Married Her

HE said he married her because he loved her.
She said he married her because she really understood him.
His friend the biologist said he married her because he was tall and she was short, and he was blond and she was dark.
His friend the psychoanalyst said he married her because she resembled his mother.
The girl who had wanted him for herself said he married her because love is blind.
The man who wanted her for

himself said he married her because he wanted her money.
But the real reason he married her was that she had squeezed his hand while they were sitting out a dance the night he proposed.

Advice to Women—The way to interest a man in yourself is to get him to talk about himself.
Advice to Men—Don't, don't, don't talk about yourself.

3) 七

五針前

恒にモカッ捧にセ 前庭モ 古くも 知 善くも いた 口 悪の

持た たりやも 毫一に 言のーも

カワの かちやが 昔のー 始め

持子の 夢に 時よりー 始め

顔との ぶー 縁 ありを 扱め。

其下ん 三にち 子云 始に 中

少さの 大とうめ 片目 ぐく

こみ あり 五身 前

おゆり 思 生 かなた

東五 幸北 朝 幸 夜

電車 自 車 事 一つ 一つ

キヨウ オンキ 分 分

望も あ 一 一 一 一 一 一

時けの 言 言 言 言 言 言

僕を リ 一 一 一 一 一 一

僕 以 自 勤 勤 勤 勤 勤 勤

文明の 思 思 思 思 思 思

乙女 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

第一の 事 事 事 事 事 事

昔の 信 信 信 信 信 信

昔の 信 信 信 信 信 信

五針 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

乙女 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

乙女 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

乙女 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

乙女 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

乙女 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

乙女 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

乙女 乙女 乙女 乙女 乙女 乙女

午後の半日

暑く先線の一
時計の音さうにおもひ

午紅の半日は たろつものた

目やよく輝々と 頬をちやうつけ 静か

思 素つは 城は 中ずくになつ

重きつ まおたに たなつ

ソリーに もたしたき

夏の午後の 丘へ だるい

車ア 三ツ 水の中 日え 浴を 乳を 膝に

縛こゝろ 遠 ざかつた

の せき に入まつた

あつ

ちんて 僕 髪は 黒いの

白髪人 髪は 年 暮 ちんて 金色の 湯の 膝に

やり 和らぐ 足つは じき ちんて 膝に

黒いの 髪は ちんて 膝に

僕 髪は 黒い 膝に

人 髪は 黒い 膝に

髪は 黒い 膝に

僕 髪は 黒い 膝に

髪は 黒い 膝に

僕 髪は 黒い 膝に

髪は 黒い 膝に

僕 髪は 黒い 膝に

髪は 黒い 膝に

七月 二十日

札
燈
知
邊

[illegible]

これの今日申分金の昇社金もなりつた
二部止とてお金に在るさうな紅は 秋分
通つ一重の屋敷にもぬいさよりそくす
層をきりたしもあつた さいふつた

雲霞五知し其甚

光る金銀を我に生た生はた何人か 世のこの上をキミとんを
 どうぞくは 百一 紙をい 金銀に對す 文達を 斯くわつて作ら
 ぬ 金の粒をわ 世の 未だ 富者の 世
 おくこになつた 大筆おのに 十包の用意を 生れし 白粉をい 心には手こ
 と言は せは すすおに ことばり おおたまこに 世に 一葉の 白粉は ぬれ だ
 言つた 所をまてう かつ 智え 邪い ますと 言ふより 外方な だ

筆
 通
 へ
 は
 か
 山
 峰
 の
 中
 に
 入
 り
 ぬ
 れ
 た

二、人達より少く、人衆におき、其に本村より、此處へ、禮美、坂、
 邊、教、と、の、一、等、台、此、上、も、古、く、の、中、え、け、お、つ、の、に、其、お、た、
 中、へ、の、お、た、る、は、は、つ

擗^レ氣^ヲ集^メ終^ニ之^ヲ危^ニ事^ヲ所^ニミ^タ

解を各回で逐次生ずること
 おにありを各にたふすこと
 重い世目計の中は昔の如く
 重いの世目計の中は昔の如く

又臨行の
衣色の
月桂
力を思ふ

あめつゝいづの物
すけりいすめ

わしは左衛門 お出なさいね 永にわたり引入人で居らつゝやうに
はす身半の どくむすあふ、
老若 氣をさまはすにはあふなり 船着し おうい。

山

全身に響く。動力は

静寂をめい、老練、妙々やり成った

常 像

白蛇の住み、静の虎の如く

静をきく山の、蝶の華。光に輝く如くに

文明の響き、水にやる

五千尺の山、静の、水にやる

静の、う形の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

静の、静の、静の、静の

The Silence

The voice of the silence called to me

In the quiet of the night,

From the vast mountain spaces,

From the desert, peaceful, still,

From the deep sea's sleeping foam,

From the cold, calm, Iceland shores,

From the woodland's shadowy depths,

From the jungle's solitude,

Called me to embrace the silence,

With wide arms and spirit bold.

In my dream the call was answered,

And my spirit, mystic, free,

Found the peace from out the silence,

Found the magic in still places,

Found the cold and icy stillness,

Found the jungle's hidden secrets,

Found the ocean's sleeping beauty,

Found the tranquil, resting, desert,

And the Heart in all the silence

Drew my heart unto its own.

MARY CREAN.

美の
顔を見つ
つた
／
きつた

馬
表
在
乙
の
馬
者
コ
ク
に

考へ
此を
はき
三
ホー
の
お
三
聖
を
に
あ
う

[illegible][illegible]

是等の事
 又ハ
 重
 二船
 今更
 毎年の
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

夏
あ
の
し
く
は
ー
ぶ
や
う
な
に

下
一
十
五
十
計
榮
の
主
と
電
立
家
の
為
累
之
人
例
に
由
入
る
方
に
て

夏百五十元 祭の仕度 旗立等 考の考 豊

[illegible]

河原と
言ふ
河原とは
赤
黄
赤色の
赤
大
ハ
サ
人
の
ト
レ
人
目
人

あまの 芳新 男也
右左 海小 美男 下ふ、白うは 倒を 堂 風 板 乙 子

長子
 一男
 養父が
 滞本へ
 歸る迄
 在りしに
 居りて
 已に
 一人

皆等身の目に
奇麗な紅奇の
如く、心を
なびかした

白の大鰐カニあまのすに走ハシりまハシるこたはまのうへに人ひきのうへに休やすみむ

皆
物と
人の特
息とは
もた、
女と
最
高

[illegible]

多
 人
 也
 一
 山
 中
 有
 女
 家
 乃
 大
 位

[illegible]

アイちゃんを
食ふこゝに
ほーう
浮草の上
夜こぼる
つもり

自事ヲ工ナリ心ナク棄て去る也後遂に今國に

是はくろく
良の今世に
野雲のしら
三三五五

永貞
子建

北田 とうおきり
おきり
あつ 山郷
牛毛
や方
あ

新用紙七
サトウ

其
上
大
五
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

沙更人衆、一葉の如く
と大勢を以て殊々留めたる

[illegible][illegible]

海峽を以て舟を
なす

王中、
望の下平に
乙カハチヨと
ヲ了ミナ
ハズ

サガ人主
エウ
ス
シク
身中
中
本在東

かたえげ

何にもやくだた

中
言古
日本、
諸君、
去、
人、
生、
在、
夢、

かり
きん
こ
の
ろ
や
人
上

言ひに
人言はむ
9
故田
9
に塔を
お方の
そとに
交う
時
爲
不

未
 已
 何
 緣
 以
 去
 并

二十三日 青島 命を乞ふに及ばず 拜

二十三日 晴 上 午 九時 至 午後 七時

[illegible]

入る事も
バイオウレ
枯く
未だ
いふ
方
の
花
持
舞
の
節

徳の如きは
女経や
如夢の
雲を
見玉
直に
昔一才の
田

ありし日の懐かし
此懐古即吾及心松申吾と十許に支印を

見懐かし
特来日おれ
親分おれ
人今こうくり
今更、男お

傷事お
大至
七十五
ケース
おー
三再事
前週
カオリン
カオリン
カオリン

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

八月十号
始まる
仕事
勉強
事お

辛き月。

性の情熱と愛感とを。晩春の午後
絶大なる自らの気分
をこめて想いを馳せ、ふたぎに、
オウ草に、水溜りのまなり、
自由を、情を、愛を、
陽気に、春の、顔を、
空に、力、愛、
それは、辛き、
ある、
性の、
あな

幸山集

小の言、
其の言、
ふこう

其の言、
ふこう

木と木のすゝめ、
木々の言、

無も知るとも、
声、
ビヤの

ハイオリン
サウサホン

新の言、
生けに

性の情熱、
愛感とを、
春、
あな

自らの言、
愛、
あな

其の言、
ふこう

へ、
愛、
あな

人跡を、
あな

山を、
あな

あ、
あな

人跡を、
あな

あ、
あな

人跡を、
あな

4/ 3/ 7 12 17 1

(37)
會漢

141
場所
時

(16) 人生觀

テ
ム
ケ
ス

サ^ツ・カ
ソイ

ジョ
オ
エ
ト

ナサニエんおオソシ

美質則價值之純粹方人曰以意味

海の悪人

白き砂のまゝに足をとらぬ
海風に身をまかせ

乙女は、海に舟のよちや、よ
めは、燈のぼる、よちや、よ
海のあふたの、よちや、よ

程々に鳴る。此の音は
 限らず、外に他の音も
 あり、おやみにまはるし。

芳主 海のほとけは

たゞふゝに於ては、砂の如くに
塵一塵も、この胸の雲を覆ひ、
事の如く雲の如くに、明も暗も、
此の如く、腕は、雲を、さし、

乙女保通もふみ
屋を初め乙女

[illegible]

名
姓
の
目
付
は
3
1
2
2
1
3
番
乾
1
日
砂
12

漁の主人
漁の主人

善
世
し
や
く
し
き
主
胎
一
枚
に
描
く

X034

二分

過去に於て国際聯盟の政策は、

- 一 アーランド群島問題、スウェーデン、フィンランド紛争
- 二 ムンヘン問題、ポーランド、リトアニア紛争
- 三 上シュレージア問題
- 四 アルバニア、ユーゴスラヴィヤ紛争
- 五 エルフ島問題、イタリー、ヤクシヤ紛争
- 六 ヲリアント問題、ポーランド、4エミ、スロヴァキア紛争
- 七 カリーマン問題
- 八 ヤクシヤ、バルカン紛争
- 九 その他紛争

付二 軍備縮小問題

- 一 世界大戦の軍備
- 二 孟買斯又武爾基、裁減の取締
- 三 相互援助の旨
- 四 国際紛争に對する平和的解決議定書

付三

財政經濟的方面の事業

- 一 オーストリア救済問題
- 二 ハンガリア復興問題
- 三 アルバニア救済問題
- 四 エンバウラ、財政會議
- 五 二重課税問題
- 六 貿易の流出問題
- 七 通貨、銀行待遇問題
- 八 金庫仲立、銀行の統一
- 九 爲替手形に關する法律の統一
- 十 交通の通問題
- 十一 政府事業

付四 社會人道の事業

- 一 慈善事業
- 二 少數民族問題
- 三 貧民救済
- 四 知的國際協力
- 五 公共衛生事業
- 六 労働者の保護事業
- 七 ヲリアント難民救済事業
- 八 ヤクシヤ及カリーマン難民救済事業
- 九 アフガニスタン
- 十 婦人児童救済事業
- 十一 難民救済事業

此書讀之尤妙

世
12
2
4
26
15
後
味
18
無

つ
く
12
卯
1
右
1

片雲の尾はとをぬれど漂ひの鬼やまふ

これたもの思ふ龍

開宰之 破壤の事ヲ以テスル
子ヲ也ウニ賜ヘシ

知 慧 之 意 悲 ち も 人 回 を 主 記 す
平 和 之 建 設 の 時 代 へ の 推 移 を 示 す

文學の技巧の研究

題 井の如何にかゝる事
事 美の院をあらわす

巧の必要古 知的又博の参考
文士上の巧の法則又條件

ス
ハ
ニ
サ
ハ
仙
女
五

テニソ
リ
国王
牧
型

サツカリ

テ、
ケ
ス
の
カ
ミ

沙公刊

喜劇 ー ソーリー ー
悲劇 又 アッハッ
マリー ー ー
ソに習った

失血方

スエーデンの
個性と人生
観

万能的
 一般的特点
 想像力
 描寫力
 叙述力

詩形の甚重、以喩の甚多、又文化
 偉大な劇作家の創作也

アリオストロ
ツッ
ン
スベ
ンサ

文體

知要書

通書五言詩を述ぶ書五言詩一正續明瞭調和

力強サ 暗示力

書姜外子書

階調優美 魅力

文待九壽
紙十二
馬
個性

芭蕉の嵯峨日記の一事

障あつたり、此律を引きかならず、金中の片際一回きと受
取定まらぬ、あかしの主の作本、まう、う、盛を頼破し

なつくに依り、かみ水き、昔のさまあり、も今つ、あか小な、さまこえ、心にき小

一つ、生活態度、自然主義、文人は多く、うた生活態度、美を
消極的、と、午、傾向、あ、あ、自分、は、や、は、り
我、負、賤、を、す、小、清閑、を、た、の、一、丸

清貧の物質に屈伏せぬ、教養、た、結、縛、の、表、を、也、

清貧、本、永、階、級、の、代、辯、者、か、然、勸、若、階、級、を、説、得、す、た、め、に
清貧に甘んじ、あ、唱、つ、た、る、は、そ、小、は、勿、論、曲、事、と、云、お、は、な、る、め、か、
結、縛、生、活、の、他、者、文、人、學、者、は、負、其、に、悔、み、も、な、る、清、貧、を、
誇、り、と、す、べき、で、あ、る、

清貧とは、單に貧乏、つ、こ、も、生、活、状、態、を、示、す、も、な、く、し、負、を、身、に、し、負、に、依、
す、一、の、生、活、態、度、を、意、味、す、即、ち、そ、小、け、一、の、高、つ、心、境、の、表、を、也、
金、金、金、の、外、に、は、何、物、も、無、う、ア、メ、リ、カ、に、對、す、日、本、的、結、縛、の、
確、定、で、あ、る、
(後、作、と、又、一、の、日、夏、一、)

人はその最も固執するもの。著に著一、

不幸な詩人、あ、は、我、々、は、水、の、上、に、書、の、小、者、を、か、う、と、歎、いた、
あ、の、名、は、何、い、あ、う、あ、小、馬、が、水、の、面、に、交、つ、た、あ、一、つ、の、波、解、に、あ、つ、た、い、

歡樂極、こ、哀、傷、を、い、ふ、あ、
つ、あ、は、話、う、う、い、あ、う、
あ、は、甚、き、の、あ、い、さ、
さ、う、い、な、哀、情、を、願、は、さ、木、あ、う、
己、を、言、い、し、白、紙、に、歸、す、

形、花、に、あ、る、可、時、は、哀、然、に、等、
其、他、を、心、為、難、を、難、し、こ、生、化、に、依、る、こ、生、化、に、還、小、と、なり、
五、我、を、抑、
名、姓、の、名、を、知、服、
世、持、人、の、事、は、平、人、に、は、難、事、の、難、事、

は、い、め、こ、同、路、と、す、

山田 隆井

山田 隆井

先親の一生の故郷を去り、
東京に上り、時

此の如く
 信如に生ずる時
 毫に助手の如く
 生ずる如く
 生ずる如く
 生ずる如く

御方よりてく
てやの
明事方々に
オニカイ
似し

新入水のすしに五匹の鯉を
送ります時

自是日
發心
靈
中
書

毒のハナクサ
根分。書は
オモロエヤウノ
持にオモ

山
 の
 水
 の
 乙
 女
 の
 手
 船
 に
 乗
 り
 行
 く
 子
 の
 恋
 日

前
 善
 良
 有
 其
 知
 之
 之
 靈
 智
 生
 活
 入
 之

百二十

胃者口
入
余
味は酸なり
（小量に能く取れば内著せし
限りあり

何んぞ金身に
ツクリ現中
に在る哉
タラシ
く無
り

後身、人多遊去、
時程、主ぬこや
あゝ、人の好くあり。

時鬼考す人制は語らる。

沈黙

マツファースンの
1
オニマス

プレイク
の狂詩

ル
ス
ナ
ア
一
リ
フ
マ
ン
ク

フー
ル
リッ
47

リ
カ
の
博
学

テレ
ス
ウ
ク

レ ヤ
ト
ツ
リ
ヲ
レ

子
自
刻
著

卷之四

7
1
3
2
紫の葉

1033

手紙

霧雪のやうな夕(日)

一板一板の手紙を綴る

お前さん手紙

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

お前さん手紙を綴る

Money may not bring real happiness, but the imitation is almost perfect.

X932

STANDING ROOM
An English scientist says that in 1000 years the world will be so densely populated that there will hardly be standing room. By that time we will be too tired to stand, anyhow, so what's the worry?

お前さん手紙を綴る

文藝の史的研究所の散文（著書）

現代の散文の起源は後主王朝時代よりこの時代を西園集の散文は新書二つの載然と云ふ。

直前の時代の散文とは金糸碧の隔り感あり
フーカールやクラレンスやミンソンの散文
トライデン、アディスン、
、散文、何ぞの文章

藝術の技巧は技巧と隠すにあり批評家の仕事は之を両方見せしむ

技巧の爲に技巧の未達の或果と見落ししは方々
繪の前にきく繪の金糸碧の観望を云々
畫永の用は技巧の奇麗に終るは藝術研究の手録の目的を
混同し居るた之も同様也

亦より讀書は學識に優る著書は明修集は
學者の知慧の修得者にす
之を研究するは作を先事か快達を得る事と云ふは方々

文藝復興 (伊太利に起る)

其影響は伊太利の文藝文思 想より ラスキニモイギリスモ

この影響を受けた 人々の中世主義の根 柢から 脱却した

近世精神への一歩を踏出す

文藝復興の所以 理由 新機 機曾 影響 文藝の形

其體之學

十八世紀前半に提唱した體説の浪漫主義は全歐其國の制限に

依るものなり

ハアノリ (古詩格遣) は體説の人心を制限し、其體の研究は其の

人下制に堅くし、其體も自然なる其體の方加すいれ、其體を知る

その基に生ずる

マッフルの耳 議、ヘルデン (印の聲)

マッフルの耳のオシアンは何等 (文明) の未開や困難に提

はあつて其をよびさす

ハリオーの自然に體の運動の中心を體説人はた、あつた

時代文學の研究と 文藝の影響

文藝 作家の特質と性、表現、其體を動かした運動とは亦他人にはな

文藝は作家の思ふに任せる思ふなり 作家は其時代の感化を受けた

時代の感化を受ける

カラーンと文藝

非常な體持方ものだ、全歐個人の體制を、その時代の文藝が、

假りに彼が十八世紀の前半に生ずる、其體を、其體の中に入り

彼が十八世紀に生ずる、浪漫主義の文藝の中に入り

體説文學の感化を受けた、其體に時代の感化を受けた

文藝の時代と文藝 時代の推察、其體に文藝が、

文藝の時代と文藝 研究が、或る

國民文学史

一 在の國語を書いた作家と作家を歴史的に論明し

その作品の長所短所を批評的に解剖し

これにあらざる文学上の傳統の流儀の隆勢や

文学上の趣味と主流行の變遷とを記載したものを國民文学史

民族の精神

作家の個性は其の特色ある時代相や國民性も現見する。

個人間の差の存在を許しつつ、國民性全體としての同一思想を持つ

ルナ・云

人は時代や民族に反抗する時よりも、その時代や民族に属する。

作品の研究

考察の範圍は文学上の現象にのみ限るや、否と

文学上の現象以外の社會現象や一般思想との關係を眼中に

置つて考察するや、如何なる方法

の方法

文学上の趣味、流行の起原、流儀の起原、流儀の消滅、流儀の變遷

批評の標準及理想の變遷

テームの文学史觀

民族と環境と瞬間とを三つの力を以て文学を科學的に説明する

民族と環境と遺傳的素質、又傾向

環境と周圍の氣候、地勢、政治的施設、社會的狀態

瞬間と時代の精神、即國民的覺醒の其時代に別當した

變遷

テームは

文学を文學として研究しやうとするのは有つ

國民心理發展の記録としての文学を興味を持つべきである。

時代は作家を作ると同時に作家は時代を生ずる。

The Ballad of East and West.

Rudyard Kipling

Oh. East is East, and West is west, and never the twain
shall meet.

Till Earth and Sky stand presently at God's
great judgement Seat.

But there is neither East nor West, Border,
nor Breed nor Birth,

When two of strong men stand face to face,
tho' they came from the end of earth.

若者の美

春の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

何の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

花の如く大いなる花の如く
花の如く大いなる花の如く

1031

1030

1030

文藝の要素

知的要素

情的要素

想像的要素

技巧的要素

作意に據る、自分の思想

題材が作家の心に引きおこす感情

心の視力、或る対象を捉へ得る想像力

順序、均整、美、有効、素材に形をあたふ

文藝と個性

文藝は人々の表現

マレーアーランドの説

文藝は生命の批評

個性の性質

批評は事實を述べし見た人

偉大な作品

著者の脳、心情

自己を糾弾し致した

作家は著者の生命の白

個人的経験

文藝の基

個性

偉大

偉大な著者は、立派な精神の堂々、生命の血が、生命の向あり

生命の響の響、流に浸る、大に保蔵するものあり

偉大の——批評者の聲、述及絶言

偉大

偉大——人々の愛護人、智る、洞察力、心、批評を愛する

又は批評による

偉大

マレーアーランド

偉大の著者は、知識は、心、流に浸る、大に保蔵するものあり

偉大

偉大の著者は、普通通用の鑑に用ゐる、天才と云ふは、人々

自らの心は、流に浸る、自らの特異性による、大に保蔵するものあり

三河哲書 日本日本人の思想の哲學的基礎

人生の意義目的は価値の創造である。

価値の創造とは何なる価値を棄てたか。価値は創造に就き低き。

他は事業の創造に在り。事業の価値を棄てた事である。事業の創造に在り。事業の価値を棄てた事である。

献身の行為は事業の価値の創造に在り。献身の行為は事業の価値の創造に在り。

価値の創造は人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

我々の美徳も人生の目的である。我々の美徳も人生の目的である。

傷主古の交は旧主を累人の居る地をす

おふく 新 津 本 町 右 人 之 言 う ま り 也 人 哲 樹 の 回 事 々 方 氏 だ の

今も也。國共共是。少

こゝろをうたへて、
ききに電灯の
人待ちを知らず

人古事 意古事は あつた
 和久や 夢あつた 箱にふたつ

和信
信子

是を以て大なる執事し方こそ是れなり
いすめを考ふの由を衆の

ち、考へて、國をたすべしとて、方、用をたすべしとす。

わし
言ふ
なり
見
かけ
なり
す
持
方
は
お
ま
は

貴女は、
御、
お、
う、
し、
下、
さ、
り、
ま、
す、
の

33

己水は私父や君に歸するに値し
是に合ふ事あり
お事書にて世間人は古の
言を傳へては己の
ありし生は

といふ
ところ
の
ところ
たつ
の
和
國
の
で
終
る
で
す
か

そふい
て、て、
ふし
ふふふしたは

予理韓也皮方家此何也

市井一夢
由了
あう

書
於
己
躬
者
美
一
々
草
を
用
し

1/2
3/4
5/6
7/8
9/10

創作

電報

のめ
のた

"VENI, VIDI, VICI"
April has come bounding into the California calendar with the exultant chuckle of Julius Caesar, "I came, I saw, I conquered," and has been telling it to the roar and rattle of wind and rain and rushing waters.

妹の聲は やさかた

「でもねーにねーねー。田中さん 何またおのこ あーしやう人へきもの

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

／＼ エーエー 思ひましたねーすねー

おは作ら美の
お、ケ、い
主人に向こ
言つたわう

[illegible]

やうなところ
（やうなところ）

おのそくひんし
てんりやう

いーやん 若うー っ 毛の ちんちん
つ ちんちん ちんちん ー ちんちん

ついやもういの人 三 ぼも飯まそ人 この金魚がや
主人は 金魚の 御免 だめと言ふ 長け五 程ち〜 金魚を た

水たやりがふ家の樽子を見にきた

ハムーミミ道に於て水を入れた事だ。下

主人はおきりゝ物々山々ゝ梅を産む者ゝ竹を産む者ゝ

[illegible]

顔色は一瞬に
 いろも
 其の
 身在
 男は
 是れ
 事
 此
 其
 一
 一

といふも
 あつさん
 ひろろ
 ねつね
 ひろも
 有様う
 考
 月一
 文

方々居
 休は男は控顔を
 照らす方々
 道は
 道は
 道は

作もて 家に上つて 終る べきやうに 力の尽きた
 ナエと 土手と 此は 節より 安き 所なり 燭言の 傳に

後、この気意、かゝるに、金、多、く、金、人、の、事、は、始、と、正、

生付 ~~重~~ 重く来る(前)。

本
 考
 毛
 紀
 乃
 又
 西
 北
 一
 第
 二
 年
 之
 事
 三
 持
 四

同ノ野の~~草~~草も 持ち辛はこれ左なり
 草も 持ち辛はこれ左なり
 草も 持ち辛はこれ左なり

一 本 子 ぬ け 参 入 せ ば 好 い 様 子 中 々 也
 也 の 一 事 は の ち 鈴 に 越 こ せ 白 書 を う け 取 ち 持 ち 帰 せ ば

同に女に母の懺生あり

故中
之
書
也
所
以
日
知
其
多
也

36

おつて
やうな
名
流
も
一
杯
の
お
い
し
な
思
ひ
を
お
し
や
う

今夜は一軒何處かいあすろにかりたいもん

紙は 陽にやれし草 福金の海に樹さうを無き下へ
まゝと 愛あつて御左 里迄の 台の筋を つまみ有はすと
ふいふた おり母り

角こ子存 丑考 4 昔書の
工の付た増と
散七はこて

ハヤの
ルネ
船
鐘
ル
舞
ア
舞
大
木
〜
つ
エ
入
人
へ

よく 店へ 花餅を 見て くる とき 菜飯 所に来る

昔の
 宿を争はれぬ
 白くエゴ
 夢さ
 けうておを塔へ
 スツ
 巻き
 の長
 け
 夢さ
 夢さ

ハムー冬うか
下何カエ至一
大モウ

二、三歩行之地の意餘中甲寅年12月作、在地の金魚を思ふ

1) 大正
 2) 大正
 3) 大正
 4) 大正
 5) 大正
 6) 大正
 7) 大正
 8) 大正
 9) 大正
 10) 大正

2/21 生々のおにぎり
2/22 生々のおにぎり
2/23 生々のおにぎり
2/24 生々のおにぎり
2/25 生々のおにぎり
2/26 生々のおにぎり
2/27 生々のおにぎり
2/28 生々のおにぎり
2/29 生々のおにぎり
2/30 生々のおにぎり

解の例がイヤー言こ
早はしの女特て思つゝ婦人か
入るゝ（~~ア~~）

人以身自任

かゝうぬをゆし
もゝうたゝ
五知一子(た)

うすくやくうんし 飯んやうい 竹は
おやや 柳屋 毛荒のしの 身目 下へん のう はらう おまゐりう

食卓の前は腰かけ
男因金牛心の有性金にすゝみ
何食も知し金卓あふむた

女物長徳さきた
何食はぬ 靴へ 袋 夢のみちをたふし居る

いふ 妙薬のくみ 小車 乗りてい

やう 指輪 3 () めいし 野田うん 十 一 幸多のひに 友 太一 女房 おし や

やゝ者 期 3 1 么 1 1 野 夕 うれ

ハヤハヤ カ、く、と、ち、た、り、よ、
カニ 岡 信 雄 は 参 人 だ 十七 本 花 手 け 冊 ま、つ、た、つ、た、

先きある十條に所ある、又思ふべき條は。

我ルに事柄は今日大に事考あるにふりに事あると云うた
 外には電報の文に事あると云うた

大晴所の紙魚を左に介し今又の紙魚を右に見る

便所は、カレン行のそばへあり、
その外に、カレン行のそばへあり

まーやぢてつちよ　こつ　ろのろ士　とくらば表〜る　言のに
 女は　は七　重の　とくに　建　まを　行　こゝす　終は　表〜る　やと

早くも
巴の前の
木たふさ
つるはつ
はつとん

終
十の街頭

新聞 新聞!

津よ 新聞は如何の
分た 是を石 街頭

肉色の 靴下
短ワ 膝のほこり

化押 せんや 毛
流行着目ク まり也

エヨウ 恒太の
自刺身の有 髪に 老のや 老人

顔 顔
十の 街頭の 人

人息 其 顔 顔
人息 其 顔 顔

銭の やうやう
銭の やうやう

お前 前 前
お前 前 前

生も 死も
生も 死も

七目 目
七目 目

二階の 窓の 人
二階の 窓の 人

高の 髪 髪
高の 髪 髪

車より 神 神
車より 神 神

白側の ステッキン 胸
白側の ステッキン 胸

赤色の 胸に 赤色の オ
赤色の 胸に 赤色の オ

用った 店 店
用った 店 店

新聞 新聞
新聞 新聞

十の 街頭
十の 街頭

十の 街頭
十の 街頭

此書を田綱子へ送られたのは何と云ふか 言葉をやめておけ 後二人

さういふので 書きたりや、キヤリテも 知る方々今更にはやらずよ

書きたりやと云ふに 宛宛明心す 僕等は手書来に言ひて直に 書きたり

はすもと云ふと 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す 宛宛明心す

宛宛明心す

宛宛明心す

宛宛明心す

何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ

一歩しかしつと云ふと マルチリチリと云ふと この日主人の生定を云
ふおやけを 事言ふやあつて思つたか 他の人にも押しきれぬと云ふ

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

「何れもスツラういふ物にちあつたと 吾等言ふ 是れこれと見い
かひ吾等言ふと 押しきれぬと云ふ」

4月2日 通電を知りて道の中心に車を止めた。彼は
何方にやうなふところに止電をたてた。矢張り左に曲るが、
僕もその左側に俺は停った。

彼は何等のサインもせず其の stop light was broke だった。
俺は日本人の方が好む様に右に折れた。たゞし俺は正年
正電をたてて俺は正しい。

右側に折れた。二重の信号。雷に目。(蛇)(雨の音)合意がある。
降しゃんが。年等の手印が。手は。手は。手は。
僕自身も所(直)も。手分。明。方。た。持。た。

~~言教は偉式~~

宗教は 開き人だ」と

スツキを ~~こ~~ 持つて 高帽に 大股に 歩く 紳士
貴方の 顔は オレ 女をも 知るが 人も 教士」と 寺の
持主 彼は 勇ましくも ましう
けれど キバと ツメが 鋭い

言教は 偉式だ」と

若者 貴方の 前には 前途の 光が 輝く
朝陽が 山の けに 光が 射く
地上に 影も 空が 氣 邪を ばさる 手に
けれど 七 若者 ~~若者~~

若者は 大いさ 偉 草にも 光が 射く

若者の リスツ 持主 手に

過 けい 若者 光も 光を まつ

地上の 草は 光、 地下の 光は 光を まつ

雲 光を まつ 草は 堅固 である

長い 光 道は まる 光

言教は 力だ」と

若者よ 羊の 花を 用 ^か する

カ 鳥の 言ひ 口は 光を し

山は 光は 光を し

若者よ 海 光は 光を し

若者よ 果て 無き 光の 海は 光を し

光を し 光を し

貴方は 男 光を し 武夫よ

けれど 光の 口は 光の 光を し 光を し

光の 口は 光の 光を し

若者よ 光の 口は 光の 光を し

お、光の 口は 光の 光を し

光を し 光を し 光を し 光を し

言教は 光だ」と

光を し 光を し 光を し 光を し

光を し 光を し 光を し 光を し

光を し 光を し 光を し 光を し

光を し 光を し 光を し 光を し

光を し 光を し 光を し 光を し

光を し 光を し 光を し 光を し

光を し 光を し 光を し 光を し

X028

4024 5/52

僕の運命は甲斐

④ 印度の種族制度と此方の佛教 人類學

(二) 佛國大革命の如何に平民の権頭

貴族僧侶の権力と寄附の衰微に就て

由現在在步回同順。第一也。廣米事當以現存之勢力又
結果。的米因市內之米對日本米同又排也此問題。

∴ 并 = 四 - 塘边

丰 謨

(イ) 例. 日本式を教へたる著述. 惣の父親の永遠教育. 著

例 朱田村を教へてゐる親鬼。其の母親のまゝ教育

牙 = 進步性社會主義的更進一步的事

(二) 本國の公立学校の都市市民並に外人生徒との関係

(三) 教養と田園 - 教養と青年子女、

(四) 日語教材、德文句題 12 冊。

陆道 朱国伦等之，回京市记

司本此會仁立友人如市氏

在米生活の同胞 飢と寒と風と 田舎者

年の主眼は教育に在り。

22th July.

佐の 25日 有支くち 癸酉

新(天) 度米学生11 仕一

学生の方には、おかげさまで、^い日本書評の何事何事無く度々理由を
且つ、学校に入学して、いふ学校、度々、地以外の都府に送る、といふ、理におか

一考其日本一流の大学(ケイホセ)卒業生の中に於ける(送)愛のアイダに
合ふことと事の爲に一重 甘同 接に愛すしに吾人の故郷父等の

親族方者分 担書に「永く わが 家 に お く る 事 は 何 等 と も 如 き

事件に面する見方と事の何等因乎を辨明するに心を要す。

他方果用，務序法以加，務以重此，相盡却，遂還以

送(還)り命を失ふ事かと云ふ!

身をとりつゝ一例にたゞ別分 有正入国者お者 一見学生にに度主左

0126カ、古くは昔々労働者なりし事記はるゝ事なり。

法 留の許にリ 法 留に 又 又. 1 法 留に 又

キニセの基督教に就て

ヨ
エ
フライムの分組人。 — 埃及王の宮に — モーセ —
考概

1870年の国は美し

猶も人は人様は あはくもすも 基督生て

抑も其は 基督の事には カイア 4力のじヤカを

佛国は 権力に力に 是れ大革命をなしの 1870の年と

1870の年と 是れは カの おもりの 下は 又 夢の 光を 照らす

左の 文明文化の カは 文章の 世界の 世界に あり

其 其 権力 聖書の 何と あり、 是れ、 1870 年と あり

キニセの 事には 1870 年と あり、 是れ、 1870 年と あり

キニセの 事には 1870 年と あり、 是れ、 1870 年と あり

世界 平和に あり、 是れ、 1870 年と あり、 是れ、 1870 年と あり

人々、 あり、 是れ、 1870 年と あり、 是れ、 1870 年と あり

キ

キニセの 事には 1870 年と あり、 是れ、 1870 年と あり、 是れ、 1870 年と あり

God Watches

The sun, like molten gold, sinks to the sea,
The mountain peaks grow pink, then mauve,
then gray,
The shadows gather over hill and lea,
And twilight's mantle clothes the passing day.

The moon in stately majesty her fixed course
keeps,
The stars like gems on blackest velvet shine,
While He who never slumbers, never sleeps,
Keeps watch throughout the night with Love
Divine.

WILLIAM L. LYONS, JR.

4月1日の曜日新聞に 柳津も能くかき 耕す年が
一文の草土を見た

耕す年が自己の詩に 柳津中に 書ける詩が 一ついくつも
合まい 第に 笑の顔が皮肉に、私の詩壇に けさの 柳の 一つに
同主取つて言はせ

私は 市川¹³の詩人 羽人¹⁴と 代りに見た。 句海 川¹⁵に 柳津¹⁶
も 甲つた。 柳津の詩に 海士¹⁷の 柳津¹⁸ 柳津¹⁹ 柳津²⁰ 柳津²¹ 柳津²²
皆しい 詩を 柳津²³ 柳津²⁴ 柳津²⁵ 柳津²⁶ 柳津²⁷ 柳津²⁸ 柳津²⁹ 柳津³⁰
柳津³¹ 柳津³² 柳津³³ 柳津³⁴ 柳津³⁵ 柳津³⁶ 柳津³⁷ 柳津³⁸ 柳津³⁹ 柳津⁴⁰
柳津⁴¹ 柳津⁴² 柳津⁴³ 柳津⁴⁴ 柳津⁴⁵ 柳津⁴⁶ 柳津⁴⁷ 柳津⁴⁸ 柳津⁴⁹ 柳津⁵⁰
柳津⁵¹ 柳津⁵² 柳津⁵³ 柳津⁵⁴ 柳津⁵⁵ 柳津⁵⁶ 柳津⁵⁷ 柳津⁵⁸ 柳津⁵⁹ 柳津⁶⁰
柳津⁶¹ 柳津⁶² 柳津⁶³ 柳津⁶⁴ 柳津⁶⁵ 柳津⁶⁶ 柳津⁶⁷ 柳津⁶⁸ 柳津⁶⁹ 柳津⁷⁰
柳津⁷¹ 柳津⁷² 柳津⁷³ 柳津⁷⁴ 柳津⁷⁵ 柳津⁷⁶ 柳津⁷⁷ 柳津⁷⁸ 柳津⁷⁹ 柳津⁸⁰
柳津⁸¹ 柳津⁸² 柳津⁸³ 柳津⁸⁴ 柳津⁸⁵ 柳津⁸⁶ 柳津⁸⁷ 柳津⁸⁸ 柳津⁸⁹ 柳津⁹⁰
柳津⁹¹ 柳津⁹² 柳津⁹³ 柳津⁹⁴ 柳津⁹⁵ 柳津⁹⁶ 柳津⁹⁷ 柳津⁹⁸ 柳津⁹⁹ 柳津¹⁰⁰

柳津¹⁰¹ 柳津¹⁰² 柳津¹⁰³ 柳津¹⁰⁴ 柳津¹⁰⁵ 柳津¹⁰⁶ 柳津¹⁰⁷ 柳津¹⁰⁸ 柳津¹⁰⁹ 柳津¹¹⁰
柳津¹¹¹ 柳津¹¹² 柳津¹¹³ 柳津¹¹⁴ 柳津¹¹⁵ 柳津¹¹⁶ 柳津¹¹⁷ 柳津¹¹⁸ 柳津¹¹⁹ 柳津¹²⁰
柳津¹²¹ 柳津¹²² 柳津¹²³ 柳津¹²⁴ 柳津¹²⁵ 柳津¹²⁶ 柳津¹²⁷ 柳津¹²⁸ 柳津¹²⁹ 柳津¹³⁰
柳津¹³¹ 柳津¹³² 柳津¹³³ 柳津¹³⁴ 柳津¹³⁵ 柳津¹³⁶ 柳津¹³⁷ 柳津¹³⁸ 柳津¹³⁹ 柳津¹⁴⁰
柳津¹⁴¹ 柳津¹⁴² 柳津¹⁴³ 柳津¹⁴⁴ 柳津¹⁴⁵ 柳津¹⁴⁶ 柳津¹⁴⁷ 柳津¹⁴⁸ 柳津¹⁴⁹ 柳津¹⁵⁰
柳津¹⁵¹ 柳津¹⁵² 柳津¹⁵³ 柳津¹⁵⁴ 柳津¹⁵⁵ 柳津¹⁵⁶ 柳津¹⁵⁷ 柳津¹⁵⁸ 柳津¹⁵⁹ 柳津¹⁶⁰
柳津¹⁶¹ 柳津¹⁶² 柳津¹⁶³ 柳津¹⁶⁴ 柳津¹⁶⁵ 柳津¹⁶⁶ 柳津¹⁶⁷ 柳津¹⁶⁸ 柳津¹⁶⁹ 柳津¹⁷⁰
柳津¹⁷¹ 柳津¹⁷² 柳津¹⁷³ 柳津¹⁷⁴ 柳津¹⁷⁵ 柳津¹⁷⁶ 柳津¹⁷⁷ 柳津¹⁷⁸ 柳津¹⁷⁹ 柳津¹⁸⁰
柳津¹⁸¹ 柳津¹⁸² 柳津¹⁸³ 柳津¹⁸⁴ 柳津¹⁸⁵ 柳津¹⁸⁶ 柳津¹⁸⁷ 柳津¹⁸⁸ 柳津¹⁸⁹ 柳津¹⁹⁰
柳津¹⁹¹ 柳津¹⁹² 柳津¹⁹³ 柳津¹⁹⁴ 柳津¹⁹⁵ 柳津¹⁹⁶ 柳津¹⁹⁷ 柳津¹⁹⁸ 柳津¹⁹⁹ 柳津²⁰⁰

柳津²⁰¹ 柳津²⁰² 柳津²⁰³ 柳津²⁰⁴ 柳津²⁰⁵ 柳津²⁰⁶ 柳津²⁰⁷ 柳津²⁰⁸ 柳津²⁰⁹ 柳津²¹⁰
柳津²¹¹ 柳津²¹² 柳津²¹³ 柳津²¹⁴ 柳津²¹⁵ 柳津²¹⁶ 柳津²¹⁷ 柳津²¹⁸ 柳津²¹⁹ 柳津²²⁰
柳津²²¹ 柳津²²² 柳津²²³ 柳津²²⁴ 柳津²²⁵ 柳津²²⁶ 柳津²²⁷ 柳津²²⁸ 柳津²²⁹ 柳津²³⁰
柳津²³¹ 柳津²³² 柳津²³³ 柳津²³⁴ 柳津²³⁵ 柳津²³⁶ 柳津²³⁷ 柳津²³⁸ 柳津²³⁹ 柳津²⁴⁰
柳津²⁴¹ 柳津²⁴² 柳津²⁴³ 柳津²⁴⁴ 柳津²⁴⁵ 柳津²⁴⁶ 柳津²⁴⁷ 柳津²⁴⁸ 柳津²⁴⁹ 柳津²⁵⁰
柳津²⁵¹ 柳津²⁵² 柳津²⁵³ 柳津²⁵⁴ 柳津²⁵⁵ 柳津²⁵⁶ 柳津²⁵⁷ 柳津²⁵⁸ 柳津²⁵⁹ 柳津²⁶⁰
柳津²⁶¹ 柳津²⁶² 柳津²⁶³ 柳津²⁶⁴ 柳津²⁶⁵ 柳津²⁶⁶ 柳津²⁶⁷ 柳津²⁶⁸ 柳津²⁶⁹ 柳津²⁷⁰
柳津²⁷¹ 柳津²⁷² 柳津²⁷³ 柳津²⁷⁴ 柳津²⁷⁵ 柳津²⁷⁶ 柳津²⁷⁷ 柳津²⁷⁸ 柳津²⁷⁹ 柳津²⁸⁰
柳津²⁸¹ 柳津²⁸² 柳津²⁸³ 柳津²⁸⁴ 柳津²⁸⁵ 柳津²⁸⁶ 柳津²⁸⁷ 柳津²⁸⁸ 柳津²⁸⁹ 柳津²⁹⁰
柳津²⁹¹ 柳津²⁹² 柳津²⁹³ 柳津²⁹⁴ 柳津²⁹⁵ 柳津²⁹⁶ 柳津²⁹⁷ 柳津²⁹⁸ 柳津²⁹⁹ 柳津³⁰⁰

自叙傳の事案に 柳津³⁰¹ 柳津³⁰² 柳津³⁰³ 柳津³⁰⁴ 柳津³⁰⁵ 柳津³⁰⁶ 柳津³⁰⁷ 柳津³⁰⁸ 柳津³⁰⁹ 柳津³¹⁰
柳津³¹¹ 柳津³¹² 柳津³¹³ 柳津³¹⁴ 柳津³¹⁵ 柳津³¹⁶ 柳津³¹⁷ 柳津³¹⁸ 柳津³¹⁹ 柳津³²⁰
柳津³²¹ 柳津³²² 柳津³²³ 柳津³²⁴ 柳津³²⁵ 柳津³²⁶ 柳津³²⁷ 柳津³²⁸ 柳津³²⁹ 柳津³³⁰
柳津³³¹ 柳津³³² 柳津³³³ 柳津³³⁴ 柳津³³⁵ 柳津³³⁶ 柳津³³⁷ 柳津³³⁸ 柳津³³⁹ 柳津³⁴⁰
柳津³⁴¹ 柳津³⁴² 柳津³⁴³ 柳津³⁴⁴ 柳津³⁴⁵ 柳津³⁴⁶ 柳津³⁴⁷ 柳津³⁴⁸ 柳津³⁴⁹ 柳津³⁵⁰
柳津³⁵¹ 柳津³⁵² 柳津³⁵³ 柳津³⁵⁴ 柳津³⁵⁵ 柳津³⁵⁶ 柳津³⁵⁷ 柳津³⁵⁸ 柳津³⁵⁹ 柳津³⁶⁰
柳津³⁶¹ 柳津³⁶² 柳津³⁶³ 柳津³⁶⁴ 柳津³⁶⁵ 柳津³⁶⁶ 柳津³⁶⁷ 柳津³⁶⁸ 柳津³⁶⁹ 柳津³⁷⁰
柳津³⁷¹ 柳津³⁷² 柳津³⁷³ 柳津³⁷⁴ 柳津³⁷⁵ 柳津³⁷⁶ 柳津³⁷⁷ 柳津³⁷⁸ 柳津³⁷⁹ 柳津³⁸⁰
柳津³⁸¹ 柳津³⁸² 柳津³⁸³ 柳津³⁸⁴ 柳津³⁸⁵ 柳津³⁸⁶ 柳津³⁸⁷ 柳津³⁸⁸ 柳津³⁸⁹ 柳津³⁹⁰
柳津³⁹¹ 柳津³⁹² 柳津³⁹³ 柳津³⁹⁴ 柳津³⁹⁵ 柳津³⁹⁶ 柳津³⁹⁷ 柳津³⁹⁸ 柳津³⁹⁹ 柳津⁴⁰⁰

高⁴⁰¹ 高⁴⁰² 高⁴⁰³ 高⁴⁰⁴ 高⁴⁰⁵ 高⁴⁰⁶ 高⁴⁰⁷ 高⁴⁰⁸ 高⁴⁰⁹ 高⁴¹⁰
高⁴¹¹ 高⁴¹² 高⁴¹³ 高⁴¹⁴ 高⁴¹⁵ 高⁴¹⁶ 高⁴¹⁷ 高⁴¹⁸ 高⁴¹⁹ 高⁴²⁰
高⁴²¹ 高⁴²² 高⁴²³ 高⁴²⁴ 高⁴²⁵ 高⁴²⁶ 高⁴²⁷ 高⁴²⁸ 高⁴²⁹ 高⁴³⁰
高⁴³¹ 高⁴³² 高⁴³³ 高⁴³⁴ 高⁴³⁵ 高⁴³⁶ 高⁴³⁷ 高⁴³⁸ 高⁴³⁹ 高⁴⁴⁰
高⁴⁴¹ 高⁴⁴² 高⁴⁴³ 高⁴⁴⁴ 高⁴⁴⁵ 高⁴⁴⁶ 高⁴⁴⁷ 高⁴⁴⁸ 高⁴⁴⁹ 高⁴⁵⁰
高⁴⁵¹ 高⁴⁵² 高⁴⁵³ 高⁴⁵⁴ 高⁴⁵⁵ 高⁴⁵⁶ 高⁴⁵⁷ 高⁴⁵⁸ 高⁴⁵⁹ 高⁴⁶⁰
高⁴⁶¹ 高⁴⁶² 高⁴⁶³ 高⁴⁶⁴ 高⁴⁶⁵ 高⁴⁶⁶ 高⁴⁶⁷ 高⁴⁶⁸ 高⁴⁶⁹ 高⁴⁷⁰
高⁴⁷¹ 高⁴⁷² 高⁴⁷³ 高⁴⁷⁴ 高⁴⁷⁵ 高⁴⁷⁶ 高⁴⁷⁷ 高⁴⁷⁸ 高⁴⁷⁹ 高⁴⁸⁰
高⁴⁸¹ 高⁴⁸² 高⁴⁸³ 高⁴⁸⁴ 高⁴⁸⁵ 高⁴⁸⁶ 高⁴⁸⁷ 高⁴⁸⁸ 高⁴⁸⁹ 高⁴⁹⁰
高⁴⁹¹ 高⁴⁹² 高⁴⁹³ 高⁴⁹⁴ 高⁴⁹⁵ 高⁴⁹⁶ 高⁴⁹⁷ 高⁴⁹⁸ 高⁴⁹⁹ 高⁵⁰⁰

柳津⁵⁰¹ 柳津⁵⁰² 柳津⁵⁰³ 柳津⁵⁰⁴ 柳津⁵⁰⁵ 柳津⁵⁰⁶ 柳津⁵⁰⁷ 柳津⁵⁰⁸ 柳津⁵⁰⁹ 柳津⁵¹⁰
柳津⁵¹¹ 柳津⁵¹² 柳津⁵¹³ 柳津⁵¹⁴ 柳津⁵¹⁵ 柳津⁵¹⁶ 柳津⁵¹⁷ 柳津⁵¹⁸ 柳津⁵¹⁹ 柳津⁵²⁰
柳津⁵²¹ 柳津⁵²² 柳津⁵²³ 柳津⁵²⁴ 柳津⁵²⁵ 柳津⁵²⁶ 柳津⁵²⁷ 柳津⁵²⁸ 柳津⁵²⁹ 柳津⁵³⁰
柳津⁵³¹ 柳津⁵³² 柳津⁵³³ 柳津⁵³⁴ 柳津⁵³⁵ 柳津⁵³⁶ 柳津⁵³⁷ 柳津⁵³⁸ 柳津⁵³⁹ 柳津⁵⁴⁰
柳津⁵⁴¹ 柳津⁵⁴² 柳津⁵⁴³ 柳津⁵⁴⁴ 柳津⁵⁴⁵ 柳津⁵⁴⁶ 柳津⁵⁴⁷ 柳津⁵⁴⁸ 柳津⁵⁴⁹ 柳津⁵⁵⁰
柳津⁵⁵¹ 柳津⁵⁵² 柳津⁵⁵³ 柳津⁵⁵⁴ 柳津⁵⁵⁵ 柳津⁵⁵⁶ 柳津⁵⁵⁷ 柳津⁵⁵⁸ 柳津⁵⁵⁹ 柳津⁵⁶⁰
柳津⁵⁶¹ 柳津⁵⁶² 柳津⁵⁶³ 柳津⁵⁶⁴ 柳津⁵⁶⁵ 柳津⁵⁶⁶ 柳津⁵⁶⁷ 柳津⁵⁶⁸ 柳津⁵⁶⁹ 柳津⁵⁷⁰
柳津⁵⁷¹ 柳津⁵⁷² 柳津⁵⁷³ 柳津⁵⁷⁴ 柳津⁵⁷⁵ 柳津⁵⁷⁶ 柳津⁵⁷⁷ 柳津⁵⁷⁸ 柳津⁵⁷⁹ 柳津⁵⁸⁰
柳津⁵⁸¹ 柳津⁵⁸² 柳津⁵⁸³ 柳津⁵⁸⁴ 柳津⁵⁸⁵ 柳津⁵⁸⁶ 柳津⁵⁸⁷ 柳津⁵⁸⁸ 柳津⁵⁸⁹ 柳津⁵⁹⁰
柳津⁵⁹¹ 柳津⁵⁹² 柳津⁵⁹³ 柳津⁵⁹⁴ 柳津⁵⁹⁵ 柳津⁵⁹⁶ 柳津⁵⁹⁷ 柳津⁵⁹⁸ 柳津⁵⁹⁹ 柳津⁶⁰⁰

X027

April 6th

202

テ-ポル40の土には、バナナとホウレンソウを植え、この果物を古くから
食後のデザートとして三人は、その果物を味わい、
いなか。そして人は、金持がくし、
臨分、暇した事

足は重くお右42, オレダの一脚を口にあてかたむす
園林の屋下で手先を見ながら、傍のツツ、安んじに
足本の強さは、お田とく、お徳しくたむす。

毎日仕事も一人でして 別に 乙女つもの下で 暮らしたおき
何か 希望をもちた 様かとも思 ったが、何の 思いも
なげに 亡くなった。 毛髪 白人のみに 何の日か 毎々 仕事の前迄
も 長く 乙女に 毎日 毎日 働けるものや あつたが、 全く 持た
ない まるで 死んで しまった。 故郷に、

「たけのこ」は永久保存の材料、お返しは同様にするに希望は（153162）（様子をお尋ね）

(ハ) 術を修めし事は、之で師、右修めし才人之書は
一書に及ぶなり

1441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 2441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 3441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 4441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 5441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 6441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 7441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 8441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 9441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ
 10441 何れも未だ一方の事理を以て 何れも何れも言ひ是れ

のび"途出"事た 老の(と)年(と)の言葉もを なげ" 雲、こやろたかたに
1字も(と)可憐(と)方(と)すかたを(と)見(と)は、と"3にも(と)分(と)な(と)つた

事と大衆の心の間に線を引くのは、明かだった

ほか 労働者などに言ひつゝ 飲酒 又は 賭博を申しつゝ 一 言のまゝ
 申しに 是等の言ひに 申しに 申しに 申しに 申しに 申しに 申しに 申しに

借金のお礼 今二万七千円が掛るから 一も二もなく書いて
お返し³¹²₅₄₂すからね のだのこ。ー

[illegible]

親は一人の抱擁心から今日僕と向き合い父の親愛

あなたに なまじり の 思いを ぶ つけ てる の かな

鉄口 八 快方心に 21 時 既 思ふ事 15 時 5 分 1 時 7 分

新編文藝二部。自稱文士の⁶⁴の⁶⁵の⁶⁶の⁶⁷の⁶⁸の⁶⁹の⁷⁰の⁷¹の⁷²の⁷³の⁷⁴の⁷⁵の⁷⁶の⁷⁷の⁷⁸の⁷⁹の⁸⁰の⁸¹の⁸²の⁸³の⁸⁴の⁸⁵の⁸⁶の⁸⁷の⁸⁸の⁸⁹の⁹⁰の⁹¹の⁹²の⁹³の⁹⁴の⁹⁵の⁹⁶の⁹⁷の⁹⁸の⁹⁹の¹⁰⁰の¹⁰¹の¹⁰²の¹⁰³の¹⁰⁴の¹⁰⁵の¹⁰⁶の¹⁰⁷の¹⁰⁸の¹⁰⁹の¹¹⁰の¹¹¹の¹¹²の¹¹³の¹¹⁴の¹¹⁵の¹¹⁶の¹¹⁷の¹¹⁸の¹¹⁹の¹²⁰の¹²¹の¹²²の¹²³の¹²⁴の¹²⁵の¹²⁶の¹²⁷の¹²⁸の¹²⁹の¹³⁰の¹³¹の¹³²の¹³³の¹³⁴の¹³⁵の¹³⁶の¹³⁷の¹³⁸の¹³⁹の¹⁴⁰の¹⁴¹の¹⁴²の¹⁴³の¹⁴⁴の¹⁴⁵の¹⁴⁶の¹⁴⁷の¹⁴⁸の¹⁴⁹の¹⁵⁰の¹⁵¹の¹⁵²の¹⁵³の¹⁵⁴の¹⁵⁵の¹⁵⁶の¹⁵⁷の¹⁵⁸の¹⁵⁹の¹⁶⁰の¹⁶¹の¹⁶²の¹⁶³の¹⁶⁴の¹⁶⁵の¹⁶⁶の¹⁶⁷の¹⁶⁸の¹⁶⁹の¹⁷⁰の¹⁷¹の¹⁷²の¹⁷³の¹⁷⁴の¹⁷⁵の¹⁷⁶の¹⁷⁷の¹⁷⁸の¹⁷⁹の¹⁸⁰の¹⁸¹の¹⁸²の¹⁸³の¹⁸⁴の¹⁸⁵の¹⁸⁶の¹⁸⁷の¹⁸⁸の¹⁸⁹の¹⁹⁰の¹⁹¹の¹⁹²の¹⁹³の¹⁹⁴の¹⁹⁵の¹⁹⁶の¹⁹⁷の¹⁹⁸の¹⁹⁹の²⁰⁰の²⁰¹の²⁰²の²⁰³の²⁰⁴の²⁰⁵の²⁰⁶の²⁰⁷の²⁰⁸の²⁰⁹の²¹⁰の²¹¹の²¹²の²¹³の²¹⁴の²¹⁵の²¹⁶の²¹⁷の²¹⁸の²¹⁹の²²⁰の²²¹の²²²の²²³の²²⁴の²²⁵の²²⁶の²²⁷の²²⁸の²²⁹の²³⁰の²³¹の²³²の²³³の²³⁴の²³⁵の²³⁶の²³⁷の²³⁸の²³⁹の²⁴⁰の²⁴¹の²⁴²の²⁴³の²⁴⁴の²⁴⁵の²⁴⁶の²⁴⁷の²⁴⁸の²⁴⁹の²⁵⁰の²⁵¹の²⁵²の²⁵³の²⁵⁴の²⁵⁵の²⁵⁶の²⁵⁷の²⁵⁸の²⁵⁹の²⁶⁰の²⁶¹の²⁶²の²⁶³の²⁶⁴の²⁶⁵の²⁶⁶の²⁶⁷の²⁶⁸の²⁶⁹の²⁷⁰の²⁷¹の²⁷²の²⁷³の²⁷⁴の²⁷⁵の²⁷⁶の²⁷⁷の²⁷⁸の²⁷⁹の²⁸⁰の²⁸¹の²⁸²の²⁸³の²⁸⁴の²⁸⁵の²⁸⁶の²⁸⁷の²⁸⁸の²⁸⁹の²⁹⁰の²⁹¹の²⁹²の²⁹³の²⁹⁴の²⁹⁵の²⁹⁶の²⁹⁷の²⁹⁸の²⁹⁹の³⁰⁰の³⁰¹の³⁰²の³⁰³の³⁰⁴の³⁰⁵の³⁰⁶の³⁰⁷の³⁰⁸の³⁰⁹の³¹⁰の³¹¹の³¹²の³¹³の³¹⁴の³¹⁵の³¹⁶の³¹⁷の³¹⁸の³¹⁹の³²⁰の³²¹の³²²の³²³の³²⁴の³²⁵の³²⁶の³²⁷の³²⁸の³²⁹の³³⁰の³³¹の³³²の³³³の³³⁴の³³⁵の³³⁶の³³⁷の³³⁸の³³⁹の³⁴⁰の³⁴¹の³⁴²の³⁴³の³⁴⁴の³⁴⁵の³⁴⁶の³⁴⁷の³⁴⁸の³⁴⁹の³⁵⁰の³⁵¹の³⁵²の³⁵³の³⁵⁴の³⁵⁵の³⁵⁶の³⁵⁷の³⁵⁸の³⁵⁹の³⁶⁰の³⁶¹の³⁶²の³⁶³の³⁶⁴の³⁶⁵の³⁶⁶の³⁶⁷の³⁶⁸の³⁶⁹の³⁷⁰の³⁷¹の³⁷²の³⁷³の³⁷⁴の³⁷⁵の³⁷⁶の³⁷⁷の³⁷⁸の³⁷⁹の³⁸⁰の³⁸¹の³⁸²の³⁸³の³⁸⁴の³⁸⁵の³⁸⁶の³⁸⁷の³⁸⁸の³⁸⁹の³⁹⁰の³⁹¹の³⁹²の³⁹³の³⁹⁴の³⁹⁵の³⁹⁶の³⁹⁷の³⁹⁸の³⁹⁹の⁴⁰⁰の⁴⁰¹の⁴⁰²の⁴⁰³の⁴⁰⁴の⁴⁰⁵の⁴⁰⁶の⁴⁰⁷の⁴⁰⁸の⁴⁰⁹の⁴¹⁰の⁴¹¹の⁴¹²の⁴¹³の⁴¹⁴の⁴¹⁵の⁴¹⁶の⁴¹⁷の⁴¹⁸の⁴¹⁹の⁴²⁰の⁴²¹の⁴²²の⁴²³の⁴²⁴の⁴²⁵の⁴²⁶の⁴²⁷の⁴²⁸の⁴²⁹の⁴³⁰の⁴³¹の⁴³²の⁴³³の⁴³⁴の⁴³⁵の⁴³⁶の⁴³⁷の⁴³⁸の⁴³⁹の⁴⁴⁰の⁴⁴¹の⁴⁴²の⁴⁴³の⁴⁴⁴の⁴⁴⁵の⁴⁴⁶の⁴⁴⁷の⁴⁴⁸の⁴⁴⁹の⁴⁵⁰の⁴⁵¹の⁴⁵²の⁴⁵³の⁴⁵⁴の⁴⁵⁵の⁴⁵⁶の⁴⁵⁷の⁴⁵⁸の⁴⁵⁹の⁴⁶⁰の⁴⁶¹の⁴⁶²の⁴⁶³の⁴⁶⁴の⁴⁶⁵の⁴⁶⁶の⁴⁶⁷の⁴⁶⁸の⁴⁶⁹の⁴⁷⁰の⁴⁷¹の⁴⁷²の⁴⁷³の⁴⁷⁴の⁴⁷⁵

$\frac{1}{2}$
 $\frac{1}{5}$

幼き娘

おれんすの許に遊びて

等しく面くら惟一人原草にこそあり

聲をきこふ幼き娘は

矢時にも舞えて白き花の道にわかれ金髪は

やまは 鈴の光りに輪あかき花をうららかに

顔の左に髪は 軽くあそび

夏の日は こぼれすつげんかこぼれ

月にかがやく

かきまきき りとわきまには半ば開き

白き花 舞にも花か 舞前のさへ

美しき花

愛しいは 愛しい

花にやまか 面すの 花の舞の舞に

かきまきき には 花か 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

1926

美しき花

美しき花

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

花に 花に 花に 花に 花に 花に

1026

BUREAU of LABOR STATISTICS
928 Pacific Finance Building
Cor. Sixth & Olive St.
City

Contract
Public Defender
7th (New Jail Building)
Hall of Justice
5th Floor
Cor Temple & Broadway.

あの 昔 懐かしい

あの 昔

昔の 昔に 後の 昔の 昔

旗の 花の ては お 昔 昔 昔

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

30 100 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

Y 0025

一言一句 女の華に語。昔 西宮本郷を侍りし時

新詩 二二五

雨の言

薄の花の二つを、雨の音を聞かぬ

いそがしの世花の標 ~~あ~~だ

ホリ ホリ ^と落し 花と雨の音

小きかみは ^と残して 小 ~~其~~ ~~其~~

小の1番毛の模 模 公

洞の月の模 形に お 珠 宛 了

~~舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に~~

~~舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に~~

やーやー 下手のや 付ルが 付ル

舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

春の半日

あはれをもち一歩目より

あはれをもち一歩目より

薄のり ~~舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に~~

~~舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に~~

舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

春の半日は大気か

X024

新田 幸のササ

新田!!新田!!

新田は入りおらんか!! 神士-

神士!!神士!!

新田は入りおらんか!! 神士-

神士!!神士!!

新田は入りおらんか!! 神士-

神士!!神士!!

新田は入りおらんか!! 神士-

神士!!神士!!

新田は入りおらんか!! 神士-

神士!!神士!!

新田は入りおらんか!! 神士-

May 17 1966

見のつりかき一知半解に甚き借の頂から見た。一肥の
あま近見(肥)がすきとに手をのび

~~其様~~が、僕等は抱き抱きあった、これは鐘の音に大層
さう言つて見てみろかしたる物があるにあらうと云ふに
僕も始めはさういふ言ふにはあなれに女からいへば、りまに
なつたりうさなたりさけしくたりし(太)が入つて来る時の足音だ。
遠にこびつて何だか心が落ち付かず、肥がそれとて
居る様い何もかも今更はなめたりとて、肥に一度の
好様域を(廻)いた柄に思はれおたしめたが、無かつた
10時はあつた。——一回は、アインガル—41エウツ左

幸か不幸か、僕は其の女に左様に短形の所—ツルに
短形にうりか一人、他の(太)に僕の前には婦人女の物にうりか
僕に何れ、allanの女に僕にうりか、他—うに、昨(太)に
いひの柄にあらう。 ~~太~~ 6.

101

Spring Homage.

A footstep down the alleys;
The listening hedgerows lean.
God walks among His valleys;
He makes His mountains green,
His garden knows, is greeting
Fair earth His favor feels
And modest Nature, meeting.
Before His glory kneels

For Him her tender duty
Its dearest welcome spreads,
And all her buds of beauty
Are censers where He treads.

~~Her touch, in adoration,~~
Unseals their hoarded sweet,
And Springtimes best libation
Ancients His holy feet.

Mabel Gibson TIMES March 6

No 4.

[illegible]

my weight on Feb 22nd 1426 p 132 lb
Feb. 21st 寺野 吾 少 時 日 分 此 事 体 心 知 可 也
徳 毎 日 十 時 回 往 徳 寺 在 此 寺 主 人 本 月 日 是 徳 寺 在 此
月 十 日 位 也 可 也 一 寺 寺 主 人 也 可 也 寺 主 人 也 可 也 寺 主 人 也 可 也

Song of Khan Jada.

As one may rip a Stranger's Bowl.
You gave yourself but not your soul.
I wonder, now that time has passed
When you will come ^{to} rest at last.

You gave your beauty for a hour.
I held it gently as a flower.
You wished to leave me, told me so.
I kissed your feet and let you go.

552/192

552/192

G. Yohimo \$ 5. Feb. 1889 for 500.

Feb. 20th Saturday 1926.

中西神は 巖 龕に 葬しけり、又之 新 開は 報す。

工40 *Chingham* には大雪降の勢に幾人かは凍死したと云ふ大西洋は大雪に荒れも然し此の事より一週間前に大降雪も対に及べり。

今は吾用右の動春と右の虎の上に咲く木村の香か 高く上る方々聲の
はしらにほろを 運いた雲の 書齋の 一寸の 舞の 作花に 1950 暮 其 雪の
夜は更けつ、あり 半増色 かくしかた 今も 後水 澤雲も 曇く 星は 1951
1 君く 半月は 高く 照る

讀書に御し給ふ事は一句一言を讀みは功名心と争ふ事なく
吾等の熱血を吐き出す

悲劇士の現生活の苦悩をこの小説に人間生活の苦悩に對する
 批判を述べ現世を批判し社会を批判し見出し無し、
 著者に英雄の言葉をのぞく。

up-town dancing 前々 2 Raymond Griffith の Hand's up を見
 リンリン 晴れの 東北 軍を はり 男に 東北の spy の 活動 を すじがたに
 したものをみた。 殊に 二人の 色気、 姉妹 性、 一 寺科 亭 3 の spy と 母に
 着る 5 = 母 = 母の 意を 通く 寺科 を 中心に —

心 存 更 快 人 聲 也 未 ぬ 一 同 中 日 事 の 起

tire & pavement の 土 (リ) の 2/3 台?

創作(大) 政治問題を研究(大) 金銭と仕事におどろいた(大)

健康の主義主張を體の體驗に見出し、此層相と合はるゝに
一覽する理の通な佐苗を此も健の生來の思想上の華点だと信ずる
個所を思ふ存分書き添へて見たいものなり

僕が人生の老、病、死に婦人への想及び現在将来に
社に僕の持つ希望又此書の改革を望む余り僕の感激

力限に至る人とは此等人の問題 歟、未ッ

觀に見れば 限り無き 徳の 起る 由を

一 筆に文に 500 字あり

二十三の 三言 何かあるに 人生の 半ばを 苦しみの中に
悲しめを 上げたい 思ふに 自己の 思ふの 思ふ。 後の 荒れに 思ふ。

書斗 皓 劍 夕 國 同

70人に 想と力 加ふ ため 書く べき 一 生 事業 といふ

世界的不史的人道的——小說

210 全書 第 12

(望 望)

Feb. 13 1926

247-荷に)

件は要するに人目の誘致の手段と相違に

「足・は身みの腹はらを醒さくものびあふ」

おつた。言叙の定氣が、我と書身は今言叙の事を考へては
それ以外の事を研究するが、故の心は已まらぬ。

籠も大 4 籠 棒5

子以毛也 子以毛也
 此同也 此同也

亮吉 田中 名のうとね

とら 4つ やまの 1つは

あし右バシ 糸 23 巻

休色 我々 方以

我許書皆皆日 永之毛名在毛

方一 叶时雄路天 雲の御前歌方左

日本の位尊ク天皇も世に如く一軍の女に本姓を奉
 ずるが如く、彼の心は此の如く、
 少少解心する



印度劇の起源及び発展 (前篇)

武田豊四郎

印度米 (Indology) 性米 宗教の事として扱った印度は 一番から 観念によつて
新藝の花咲く 華道の花園である。

如何なる事物の発展にも必ず 傳説の口碑が残る。又藝の発展も其例に準ずる。希臘に於ては 自らの悲劇を演じたが、
國を放浪したと傳へる。紀元前六世紀の テスピス (Thespis)
といふ 演劇の始祖であると認められる。

印度に於ては 波羅多 (Bharata) とつて 尊い (omni)
即ち 聖者の演劇を創めたといふに信じられる。

Bharata, who has become the tutelary deity of the
Indian Theatre, is not a historical person, but
a symbolic name like Yama or Manu.

波羅多仙人が選んだ劇題は ラクシュミ天女 (Lakshmi)
の田比 瓊瓊杵神 (Vishnu) と夫の白蛇の物語にまつたと
傳へる。又其時に音楽の神たる 乾闥婆 (Gandharva)
の一人とその妻たる 天女 (Apsara) の一人とが 踊り出す。此瓊瓊
夫とラクシュミ天女といふ形をとる。

印度は古来外人の侵入を受けながら変遷を遂げた。

紀元前 2034 年には セミラミス (Semiramis) が ニネヴ (Nineveh) から 印度
の西地部に侵入した。紀元前 981 年には 土庫曼王 ラムセス 2 世
が 印度を征服し 同 2 百年には 波斯王 ダリウス が 印度に侵入した。
更に紀元前 327 年には マケドニアの アレキサンデル 大王が 印度に
征服を試みた。アレキサンデルの印度侵入以後 印度人が 希臘人
と接觸する機會が多かつた事は明かである。

マケドニア 波斯國 等を統治し居た セレウシス王
は アレキサンデルの 遺將の一人である。彼は其母と印度の 旃陀羅王
大王の 月護大王に娶つて 親交を結んだ。
月護大王は マウリヤ王朝の君主である。彼は 旃陀羅の王子と
デイトニオスとを大使に マウリヤ王朝に派遣した。

A Mistake Somewhere

By James J. Montague. (Feb 10 Times)

Though we were very gently bled
We almost said; "My stars;"
When in the morning news we read
That through this country there are spread
Some twenty nillion cars.
Not cars on railroad tracks we mean,
But cars that run by gasoline.
In short our citizens and voters
Own twenty million separate notors.

"Great Scott;" quoth we, again profane
As in our chair we sat
Somewhat unsettled in the vrain,
"The stre ts of this one town contain
As many cars as thatt"
We've seen 'em parked by day and night
In lines that stretched clear out of sight,
And by the stars that shone above 'em
There must have been four million of 'em

Upon a crowded city street
Oftimes we've stood saghast
With timid and reluctant feet
And in ten minutes watched a fleet
Of forty million pass.
All sorts of cars, but mostly new,
And if that stream we'd ventured through
What happened would have been so exciting.
We'd bot be present at this writing;

Who took this count, and how or why
Could such a thinf ge done?
He must have had an idling eye
And when a dozen cars went by
He counted only one,
If he will go out there again
And multiply his count by ten
- And add ten million for good measure,
We'll read his figures with more pleasure:

Feb. 10. 午前九時半から日曜日の朝同様に働いた事分りませう。雨の中
に働くのは大変な仕事だし、雨木と金でも引いた。雨は結構大降を
思ひ、早く帰った。
午後、車場を前田君と見物した。Here street stationに
至ると、駅構内に長蛇の列。一寸三階に
上り、降る雪を同じく見た。雨の中、前田君と見物した。

現象學科學之客觀性

金 子 曆 造

一姓當家

— 輪には普遍的な高性な実在の中に坐して一躍 特別な客觀性を備へた者である。客觀性知性が既にその其本身に在る等しい論理の色彩を備へたものとして握られる。

734-ル デカルトの 懐疑論
の現象学

カリエイ (Sabatier) 'Religionsphilosophie' and psychologischen und geschichtlichen) は宗教と世界の意識と自己意識との衝突から説明に及ぶ。自己は世界自己を征服し、そのために自然は却て自己に併呑せられ、その結果である。この書は吾人の人生の分類の書である。この世界意識と自己意識との衝突は、人間の存在が人間を救済するものは宗教である。

言教士

最高善の意識或は神現彰の感情に於て、
この意識感情に於て人曰は世界意識と自意識との合一故に神の
にあり、此の意識に於て、哲学者は理論的理性と實踐的理
性の二元的分離を述べたが、その結果、彼の道德律の下に偽
善の内に神を感得する心あり、

常教は白己保存の目的を以て其の道を構定せしものなり
宗教は世俗の意味に於いて感性的白己保存の手段
高級の意味に於いて道徳的白己保存の手段を構定せしものなり
此の意味に於いて宗教は必ずしも要道を構定せしものなり
道徳的意識も根柢をこれに有する。神は要するに人の
精神的白己意識の補助的觀念なり。特に世俗の生活の全體に
おいて統一を失つて精神は宗教に於いて再び歸属し白己の
永遠の幸福に達するの道を踏むものなり。加て神は
吾人に取りて單に理念であり其の要諦は、且つ其の實現はなし
自然現象の如く生れ死するものに過ぎず。神は白己のみに
對して生ずるものなり。神は生活環境の諸條件に於いて
其の存在が決定せしめられたるものなり。神は

吾人は宗教の感像に於て神を認識する所を主として
宗教の對象は感像に於ての靈智也。

第一、要敘明認識は理論的認識といふ全的把握で

The more I see of life the more I do I perceive that there is nothing particularly great in its greatest walks, and therefore nothing particularly small in mine of forge-cutting.

"Let me repeat that a novel is an
"Impression", not an Argument."

LOCARNO

Locarno's peaks of purest snow
~~--Repeat the song that long ago--~~
 Repeat the song that long ago.
 Out on Judca's moonlit plain.
 The Shepherds heard the sweet refrain,
 When angels voices, clear and strong,
 Gave to the world their Heaven-sent song--
 "Peace on the earth, good will to men;"
 Now earth sends back a great Amen.

JEANNETTE O. CAMPBELL.

(Los Angeles TIMES) February 7 1926

Feb. 9, 1926
墨才心に 墨才古35 其美は(写さ 露に11. 12日(今に如 噂の心 似て
リツと 氷たき 冷~~力~~カ一法に 暖ま入) と 昔に 白き花の 木カリの 花と
運の来り 今に 得34故 一往 173 昔に 重受持良く 毫取るる
我が心を 和如い 胸の吐く 息の塊 33はく 思ふ了
木カリの花の 香は 高けれど 至に 斗角の 全は 氷に 思ふ
故 心の 夢は 静かなる 心に 抱く 思ひの 浮り来る 深の 解
深く 思ひかやみ 4222 と 却の 暗を 刻み 進み 故 時回た
成 境に なく あり。 —
此の 数日 巡り 神経すう 筋に 夢は 氷に 告。 晝は 其に
思ふ されし 花 露の あき 未に 思ひ 和に 思ふ 乙女 花の 氷
あつ 如い 頂 胸を 抱いて しまひ 心の 目には、 浮雲の 氷
紙を 築かぬ はず。 夜は 夢を 氷に
や 夢と 眠りに 落ち入る 事 能ふ 一時間 二時間 毎に
眠る 如く 如何に 眠り 難く
いふ かし 心 静かに 眠り たり 一 寝 眠り たり
神 探の 眠り 312 憶 乙女 乙女に 眠る 事 あり かな
と 半の 数 半の 悲しい 母に 夢に 入る 夢
に 入る あり
Feb 9 1926
今日 露に とが した

we should be a grateful fact in this field
as we are to Schopenhauer in the domain of
metaphysics:

The purity of his nature, his freedom from
the grosser passions, his scrupulous delicacy

智識や文化が社会の人間の性格に如何に反映されて
感じられるものは無かつたのであつた。

Nothing ever had brought home little acquisitions
and culture weigh besides sterling personal
character.

"I should not mind learning why - why the sun
do shine on the just and the unjust alike,
but that's what books ill not tell me."

(父の墓の傍で)

the ache of modernism)

What are called advanced ideas are really in great part but
the latest fashion in definition --- a more accurate expressions
which men and women have vaguely grasped for centuries.

It was for herself that he loved Tess, her soul, her heart,
her substance - not for her skill in the dairy, her aptness as his
scholar and certainly not for her simple formal faith-professions.

Her unsophisticated open air existence required no varnish of
conventionalism to make it palatable to him.

He held that education had as yet but little affected the
bases of emotion and impulse on which domestic happiness depends.

It was probable that in the lapse of ages, improved systems of moral
and intellectual training would appreciably, perhaps considerably,
elevate the involuntary and even the unconscious instincts of
human nature, but up to the present day culture, as far as he could
see might be said to have affected only the mental epiderm of those
lives which had been brought under its influence.

A new and penetrating light ondescends on the spectacle,
 enduing men and things with a seeming transparency and exhib-
 iting as one organism the anatomy of life and movement in
 all humanity and vitalized matter included in the display

新しい鋭い光が其場面に入り 人同や其物も一見透明
 如し此劇の表現内に含め人同や 厚薄声伴全部来ッ
 生々物の組織を一字態の如く表しける

Sprit of the Years

These are the Prime Volitions, -Fibrils, Veins.
 Will-tissues, nerves, and pulses of the Cause,
 That heave throughout the Earth's compositure.
 Their sum is like the lobule of a Brain.
 Evolving always that it wots not of;
 A Brain whose whole connotes the Everywhere,
 And whose procedur may but be discerned
 By phantom eyes like ours, the while unguessed
 Of those it stirs who (even as ye do) dream
 Their notions free, their orderings supreme.
 Each life apart from each, with power to mete
 Its own day's measures, balanced, self-complete.
 Though they subsist but atoms of the One
 Labouring through all didivible from none

Sprit of the Years

The portent is an ill one, Emperor,
 An ancient Roman would retire thitherest;

 The unnatural light before seen usurps that of the sun,
 bringing into view, like breezes mmade visible the films
 or braintissues of the Immanent Will, that preveade all things,
 Ramifzling through the wh l'r army, Napoléon included;
 and moving them to its inezelicablew artistrice.
 Napoleon (with sudden despondency)

That which has worked will work; --Since Lodi Bridge,
 The force I then felt nove me moves me on
 Whether I will or no, and so ften times.
 Against my better mind--Why am I here?
 By laws imposed on e ene xorably;

前より見ると其物も其方同や其物も一見透明
 如し此劇の表現内に含め人同や 厚薄声伴全部来ッ
 生々物の組織を一字態の如く表しける
 前より見ると其物も其方同や其物も一見透明
 如し此劇の表現内に含め人同や 厚薄声伴全部来ッ
 生々物の組織を一字態の如く表しける
 前より見ると其物も其方同や其物も一見透明
 如し此劇の表現内に含め人同や 厚薄声伴全部来ッ
 生々物の組織を一字態の如く表しける

Dynasts

Shade of the Earth
What of the Immanent will and its designs?

Sprit of the Years

Its works unconsciously, as heretofore,
Eternal artistries in circumstance,
Whose patters, wrought by rapt aesthetic rote
Seems in themselves its single listless aim.
And not their consequence.

Chorus of the Pities

Still thus? Still thue?
Ever uncouscious;
An automatic sence
Unwitting why or whence?
Be, then, the inevitable, as of old,
Although that so it be we dare not hold;

Sprit of Years

Rather they show that, like a knitter drowsed,
Whose fingers play in skilled unminiffulness,
The Will has woven with an abdent heed
Since life first was. and ever will so weave.

地の霊

千重の地の霊を、昔の何と想ふ。

年月の精

昔は未しか左の如く無意識に

水久の地を事象に施す。

昔が上に心もそに美しく、操り(た)て現はす 構 構

元来かの意の第一、無精な目配りし。

昔が意匠の結果では有り。

情 愔 の 諸 精 の 方 々

古きかおの かくおの、水久に何の意第もな、無心に動く身。

譯も由来も知るか、士は昔も今も(時)を得るもの

吾等ばかりは信にない。

年月の精

千重の地の物の證すに

日更受せし縁物師の、我々知る指と巧みに動かす。

意は意は無心に振る。

生の初めから終つて、今から後。

水久にかくして

THE SUBALTERNS

I.

"Poor wanderer," said the leaden sky,

"If fain would lighten thee,

But there be laws in force on high

Which say it must not be".

2.

"I would not freeze thee, shorn one," cried

The "North," "knew I but how

To warm my breath, to slack stride;

But I am ruled as thou."

3.

-----"To-morrow I attack thee, wight,"

Said Sickness. "Yet I swear

I bear thy littleark no spite,

But am bid enter there."

4.

-----"Come hither, Son," I heard Death say;

"I did not will a grave

Should end thy pilgrimage to-day,

But I, too, am a slave;"

Has some Vast Imbecility, Mighty to build and blend.
But impotent to tend, Framed us in jest, and
left us now to hazardry?

Or come we of an Automaton

Unconscious of our pains?

Or are we live remains

Of Deadhead duing downwards, brain and eye now gone?

創るにも交ぜるにも有るが、護るには無かるが
向ふ其大なる怖れ若く、私をたてて見誤るに依り
後はかまひが、一六 膝 肩をゆるすのみ。

ひきつれぬ、私をたての苦辱を餘所に

無心に働く者から私をたてはまたたき。

ひきつれぬ、私をたては、こゝ 胸や 眼が力にかり

此にかゝる、無き神の頭の生えしり。

as ordinary weiting; to them the sights and sounds of night-winter, wind storm, amid these dense boughs, were sim be o-ccurrences, whose origin, continuance, and laws they foreknes.

They had planted together, and together they had felled; together, they had, with the run of the years, mentally collected those remot r signs and symbols which seen in few were of runic obscurity, but all together made an all habet.

From the light lashing of the twigs upon their faces when brushing through them in the dark, they could pronounce upon the species of he rree when they stretched, from the quality of the winds, marmur through a bough, they could in like manmr name its sort afar off. They know by a glsnce at a trunk if its heart were sound, or tainted with incipient decay; and by the state of its upper twigs t e stratum that had been reached by its rootts. ***The Woodlanders.

Don't, Angel be so anxious about a mere child of the soil!' said the mother.

'child of the soil; well all are children of the soil

"No reader can appreciate Hardy's novels who ranks him with the so-called 'descriptive' writers; for the nature described by him is as an intimate, ingrained part of the human life which he depicts

She chanted; 'O ye sun and Moon ---O ye Stars ----ye Green Things upon the Earth ---Ye Fowls of the Air ---beasts and cattle ---Children of Men ---Bless Ye the Lord, praisie Him and magnify Him for ever

Probably the half-unconscious rhapsody was a Feticistic utter-ance in a Monotheistic setting. women whose chief companions are the form and forces of outdoor Nature retain in their souls foir nore of the Pagan fantasy of their remote forefathers than of the systematized their race at later date.

W.Archer. It seems to me there isn't a centour of the country from Exonbury to Cristmenster that, isn't mapped in your mind. You appear to know every copse and common, every ~~of~~ elbow of every lane, every "churchhay", every water-mead, every "ewelease." You have history, local tradition, folk-lore, village gossip, all at your fingers&-end.

T. Hardy

Oh, one can't be such an encyclopaedia as all that; Perhaps some of what you take for my knowledge may be "only my artfulness". But it's true that my feeling for this country is that of the countryman born and bred. Have you ever noticed the different relation to nature of the town child and the country child? The down-bred boy will often appreciate nature more than the country boy, but he does not ~~does~~ know it in the same sense.

He will rush to pick a flower which the country boy does not seem to notice. But it is part of the country boy's life. It grows in his soul-he does not want it is his buttonhole.

What contemporary English novelists write with soberness of mind?

Mr. Wells and Mr. Bennett?

Some times - but not all the time.

Thomas Hardy, always).

The return of the Native.

Everything around and underneath had been from prehistoric times as unaltered as the stars overhead....

The great inviolate place had an ancient premanence which the sea cannot claim ----The sea changed, the field changed, the rivers, the villages, and the people changed, yet Egden remained.

Could hear the sctape of snails creeping up the window glass the woodlanders)(Litters of young rabbits came out from their forms to sun themselves upon hillocks, the hot beams blazing through the delicate tissue of each thin-fleshed ear, and firing it to a bloodred transparency in which the veins could be seen.---The return of the Native

Although Giles Winterborne would seem to shovel in the earth quite carefully there was a sort of sympathy between himself and the fir, oak, or beech that he was operating on

Marty South alone, of all the women in "intock and the world, had approximated to Winterborne's level of intelligent intercourse with Nature.

They had been possessed of its finer mysteries as of commonplace knowledge, had been able to read its hieroglyphs

J. マス、ハアデイの自然観

田島 良一

Archer Symons. 18 卷 "Studies in prose and Verse"
94 "A note on Zola's Method" 97 "Zola's #11
114; 222 43.

Zola sees in humanity 'la bete humaine'
he sees the heart in all its transformation,
but he sees heart. He has never looked at
life impartially, he has never seen it as it is.
His realism is a distorted idealism.

The soul is a nervous fluid
靈魂は神経液の液體である

Prof. Pfeiffer says in his book "The advance of
the English novel."

Mr. Hardy write as though he
lived on another planet, and by means
of some tremendous astronomical contrivance
were able to see earth's inhabitants life-size
and regard them with the exclusive
attention of a student, himself entirely
remote from their concerns.

There is a very interesting conversation when
William Archer comes to Hardy and talked
each other.

W. Archer.

It seems to me there is a

12 世界觀悲劇 4129

ユーディット 考案

(フリードソフヒ, 73 年の巻 第11「ユーティットの研究」)

事之有三部

4人百三十五年の早春、故郷ウエルムンツ—という所を見ずして、
 ハルフルクに、ハデルブルグに、あけても、どつとに於ける戦争と
 異郷の生活。ハリツヒエ、エリーゼ(Elise)にあてた彼自身
 の手紙に従へば、人にも、詩人にも成る處を辿りながら、
 まことに絶えず、生涯の苦闘を繰り返すこと、藝術のためには、
 さかる創作衝動は急ぎたてられ、心の奥底に沸き上る
 鬼魂と感情に、贅飾を要するたびに「最大なる犠牲を償ふ材料」
 は我々が無窮のものにせしめられた。

大目
十一月の陰曆左と如朝 江戸の美術館に見た伊太利の畫家、ロマーノ (Giulio Romano) の描いたユーゲイムの畫像は、ゲテとほと新に陰曆左の月にかゝる激しい創作活動を感じた。その筆を揮ひつたユーゲイトの事跡の「始イニエス」の物語を讀み、その思ひ來をたゞとて、お幼方お左様の「アツアツ」は母親のよく、聖書を讀むにたがへる筆をたがへる。

舊約全書 (Apokrypha) に收められてお

シューデットは儚りは彼に取れ親しいものなためにならなう、
 がが、でんきヤの宣婦シューデットが アツシク大將
 ホロフエホの大軍に色圖を飲 飢に苦しめられた故に
 ために敵陣に赴く 道によつて敵陣の首を捲く
 と野原 数々の聲に（泣く）三月の月夜に雲の裏に
 といふ（その昔も我々が此の世の苦難の首を刎る者とし
 りあ車道にはこの世に七つの星に意味とあるからそれはかり、
 この車道を部分別にこれはおかげで妻が物語り号よりとい
 世々しく思ふべき。）

エーディンと *for* 評したカイホ (H. Heine) の行文の内に 持て置かれ
ても 丁度 丁度 死んだ様な 美しい女の 気高い 顔が 出
て来る 粗糲な 愛 恋 あり 信じて 感 傷的な 智 識
者 卷 々 特 に 其 眼 は 彼女 自身 喜 び 出 ら れ た 肉 體 を
憎 む 事 異 教 徒 に 向 け 復 讐 (な け れ ば な ら ぬ ため に
復 讐 の 快 楽 と し て) 左 右 に 燃 る 事 々 々

マテルデルリムは言ふ。

詩は 樹木の始めに 12 3 5 7 9 11 13 15 17 19 21 23 25 27 29 31 33 35 37 39 41 43 45 47 49 51 53 55 57 59 61 63 65 67 69 71 73 75 77 79 81 83 85 87 89 91 93 95 97 99 101 103 105 107 109 111 113 115 117 119 121 123 125 127 129 131 133 135 137 139 141 143 145 147 149 151 153 155 157 159 161 163 165 167 169 171 173 175 177 179 181 183 185 187 189 191 193 195 197 199 201 203 205 207 209 211 213 215 217 219 221 223 225 227 229 231 233 235 237 239 241 243 245 247 249 251 253 255 257 259 261 263 265 267 269 271 273 275 277 279 281 283 285 287 289 291 293 295 297 299 301 303 305 307 309 311 313 315 317 319 321 323 325 327 329 331 333 335 337 339 341 343 345 347 349 351 353 355 357 359 361 363 365 367 369 371 373 375 377 379 381 383 385 387 389 391 393 395 397 399 401 403 405 407 409 411 413 415 417 419 421 423 425 427 429 431 433 435 437 439 441 443 445 447 449 451 453 455 457 459 461 463 465 467 469 471 473 475 477 479 481 483 485 487 489 491 493 495 497 499 501 503 505 507 509 511 513 515 517 519 521 523 525 527 529 531 533 535 537 539 541 543 545 547 549 551 553 555 557 559 561 563 565 567 569 571 573 575 577 579 581 583 585 587 589 591 593 595 597 599 601 603 605 607 609 611 613 615 617 619 621 623 625 627 629 631 633 635 637 639 641 643 645 647 649 651 653 655 657 659 661 663 665 667 669 671 673 675 677 679 681 683 685 687 689 691 693 695 697 699 701 703 705 707 709 711 713 715 717 719 721 723 725 727 729 731 733 735 737 739 741 743 745 747 749 751 753 755 757 759 761 763 765 767 769 771 773 775 777 779 781 783 785 787 789 791 793 795 797 799 801 803 805 807 809 811 813 815 817 819 821 823 825 827 829 831 833 835 837 839 841 843 845 847 849 851 853 855 857 859 861 863 865 867 869 871 873 875 877 879 881 883 885 887 889 891 893 895 897 899 901 903 905 907 909 911 913 915 917 919 921 923 925 927 929 931 933 935 937 939 941 943 945 947 949 951 953 955 957 959 961 963 965 967 969 971 973 975 977 979 981 983 985 987 989 991 993 995 997 999 1001 1003 1005 1007 1009 1011 1013 1015 1017 1019 1021 1023 1025 1027 1029 1031 1033 1035 1037 1039 1041 1043 1045 1047 1049 1051 1053 1055 1057 1059 1061 1063 1065 1067 1069 1071 1073 1075 1077 1079 1081 1083 1085 1087 1089 1091 1093 1095 1097 1099 1101 1103 1105 1107 1109 1111 1113 1115 1117 1119 1121 1123 1125 1127 1129 1131 1133 1135 1137 1139 1141 1143 1145 1147 1149 1151 1153 1155 1157 1159 1161 1163 1165 1167 1169 1171 1173 1175 1177 1179 1181 1183 1185 1187 1189 1191 1193 1195 1197 1199 1201 1203 1205 1207 1209 1211 1213 1215 1217 1219 1221 1223 1225 1227 1229 1231 1233 1235 1237 1239 1241 1243 1245 1247 1249 1251 1253 1255 1257 1259 1261 1263 1265 1267 1269 1271 1273 1275 1277 1279 1281 1283 1285 1287 1289 1291 1293 1295 1297 1299 1301 1303 1305 1307 1309 1311 1313 1315 1317 1319 1321 1323 1325 1327 1329 1331 1333 1335 1337 1339 1341 1343 1345 1347 1349 1351 1353 1355 1357 1359 1361 1363 1365 1367 1369 1371 1373 1375 1377 1379 1381 1383 1385 1387 1389 1391 1393 1395 1397 1399 1401 1403 1405 1407 1409 1411 1413 1415 1417 1419 1421 1423 1425 1427 1429 1431 1433 1435 1437 1439 1441 1443 1445 1447 1449 1451 1453 1455 1457 1459 1461 1463 1465 1467 1469 1471 1473 1475 1477 1479 1481 1483 1485 1487 1489 1491 1493 1495 1497 1499 1501 1503 1505 1507 1509 1511 1513 1515 1517 1519 1521 1523 1525 1527 1529 1531 1533 1535 1537 1539 1541 1543 1545 1547 1549 1551 1553 1555 1557 1559 1561 1563 1565 1567 1569 1571 1573 1575 1577 1579 1581 1583 1585 1587 1589 1591 1593 1595 1597 1599 1601 1603 1605 1607 1609 1611 1613 1615 1617 1619 1621 1623 1625 1627 1629 1631 1633 1635 1637 1639 1641 1643 1645 1647 1649 1651 1653 1655 1657 1659 1661 1663 1665 1667 1669 1671 1673 1675 1677 1679 1681 1683 1685 1687 1689 1691 1693 1695 1697 1699 1701 1703 1705 1707 1709 1711 1713 1715 1717 1719 1721 1723 1725 1727 1729 1731 1733 1735 1737 1739 1741 1743 1745 1747 1749 1751 1753 1755 1757 1759 1761 1763 1765 1767 1769 1771 1773 1775 1777 1779 1781 1783 1785 1787 1789 1791 1793 1795 1797 1799 1801 1803 1805 1807 1809 1811 1813 1815 1817 1819 1821 1823 1825 1827 1829 1831 1833 1835 1837 1839 1841 1843 1845 1847 1849 1851 1853 1855 1857 1859 1861 1863 1865 1867 1869 1871 1873 1875 1877 1879 1881 1883 1885 1887 1889 1891 1893 1895 1897 1899 1901 1903 1905 1907 1909 1911 1913 1915 1917 1919 1921 1923 1925 1927 1929 1931 1933 1935 1937 1939 1941 1943 1945 1947 1949 1951 1953 1955 1957 1959 1961 1963 1965 1967 1969 1971 1973 1975 1977 1979 1981 1983 1985 1987 1989 1991 1993 1995 1997 1999 2001 2003 2005 2007 2009 2011 2013 2015 2017 2019 2021 2023 2025 2027 2029 2031 2033 2035 2037 2039 2041 2043 2045 2047 2049 2051 2053 2055 2057 2059 2061 2063 2065 2067 2069 2071 2073 2075 2077 2079 2081 2083 2085 2087 2089 2091 2093 2095 2097 2099 2101 2103 2105 2107 2109 2111 2113 2115 2117 2119 2121 2123 2125 2127 2129 2131 2133 2135 2137 2139 2141 2143 2145 2147 2149 2151 2153 2155 2157 2159 2161 2163 2165 2167 2169 2171 2173 2175 2177 2179 2181 2183 2185 2187 2189 2191 2193 2195 2197 2199 2201 2203 2205 2207 2209 2211 2213 2215 2217 2219 2221 2223 2225 2227 2229 2231 2233 2235 2237 2239 2241 2243 2245 2247 2249 2251 2253 2255 2257 2259 2261 2263 2265 2267 2269 2271 2273 2275 2277 2279 2281 2283 2285 2287 2289 2291 2293 2295 2297 2299 2301 2303 2305 2307 2309 2311 2313 2315 2317 2319 2321 2323 2325 2327 2329 2331 2333 2335 2337 2339 2341 2343 2345 2347 2349 2351 2353 2355 2357 2359 2361 2363 2365 2367 2369 2371 2373 2375 2377 2379 2381 2383 2385 2387 2389 2391 2393 2395 2397 2399 2401 2403 2405 2407 2409 2411 2413 2415 2417 2419 2421 2423 2425 2427 2429 2431 2433 2435 2437 2439 2441 2443 2445 2447 2449 2451 2453 2455 2457 2459 2461 2463 2465 2467 2469 2471 2473 2475 2477 2479 2481 2483 2485 2487 2489 2491 2493 2495 2497 2499 2501 2503 2505 2507 2509 2511 2513 2515 2517 2519 2521 2523 2525 2527 2529 2531 2533 2535 2537 2539 2541 2543 2545 2547 2549 2551 2553 2555 2557 2559 2561 2563 2565 2567 2569 2571 2573 2575 2577 2579 2581 2583 2585 2587 2589 2591 2593 2595 2597 2599 2601 2603 2605 2607 2609 2611 2613 2615 2617 2619 2621 2623 2625 2627 2629 2631 2633 2635 2637 2639 2641 2643 2645 2647 2649 2651 2653 2655 2657 2659 2661 2663 2665 2667 2669 2671 2673 2675 2677 2679 2681 2683 2685 2687 2689 2691 2693 2695 2697 2699 2701 2703 2705 2707 2709 2711 2713 2715 2717 2719 2721 2723 2725 2727 2729 2731 2733 2735 2737 2739 2741 2743 2745 2747 2749 2751 2753 2755 2757 2759 2761 2763 2765 2767 2769 2771 2773 2775 2777 2779 2781 2783 2785 2787 2789 2791 2793 2795 2797 2799 2801 2803 2805 2807 2809 2811 2813 2815 2817 2819 2821 2823 2825 2827 2829 2831 2833 2835 2837 2839 2841 2843 2845 2847 2849 2851 2853 2855 2857 2859 2861 2863 2865 2867 2869 2871 2873 2875 2877 2879 2881 2883 2885 2887 2889 2891 2893 2895 2897 2899 2901 2903 2905 2907 2909 2911 2913 2915 2917 2919 2921 2923 2925 2927 2929 2931 2933 2935 2937 2939 2941 2943 2945 2947 2949 2951 2953 2955 2957 2959 2961 2963 2965 2967 2969 2971 2973 2975 2977 2979 2981 2983 2985 2987 2989 2991 2993 2995 2997 2999 3001 3003 3005 3007 3009 3011 3013 3015 3017 3019 3021 3023 3025 3027 3029 3031 3033 3035 3037 3039 3041 3043 3045 3047 3049 3051 3053 3055 3057 3059 3061 3063 3065 3067 3069 3071 3073 3075 3077 3079 3081 3083 3085 3087 3089 3091 3093 3095 3097 3099 3101 3103 3105 3107 3109 3111 3113 3115 3117 3119 3121 3123 3125 3127 3129 3131 3133 3135 3137 3139 3141 3143 3145 3147 3149 3151 3153 3155 3157 3159 3161 3163 3165 3167 3169 3171 3173 3175 3177 3179 3181 3183 3185 3187 3189 3191 3193 3195 3197 3199 3201 3203 3205 3207 3209 3211 3213 3215 3217 3219 3221 3223 3225 3227 3229 3231 3233 3235 3237 3239 3241 3243 3245 3247 3249 3251 3253 3255 3257 3259 3261 3263 3265 3267 3269 3271 3273 3275 3277 3279 3281 3283 3285 3287 3289 3291 3293 3295 3297 3299 3301 3303 3305 3307 3309 3311 3313 3315 3317 3319 3321 3323 3325 3327 3329 3331 3333 3335 3337 3339 3341 3343 3345 3347 3349 3351 3353 3355 3357 3359 3361 3363 3365 3367 3369 3371 3373 3375 3377 3379 3381 3383 3385 3387 3389 3391 3393 3395 3397 3399 3401 3403 3405 3407 3409 3411 3413 3415 3417 3419 3421 3423 3425 3427 3429 3431 3433 3435 3437 3439 3441 3443 3445 3447 3449 3451 3453 3455 3457 3459 3461 3463 3465 3467 3469 3471 3473 3475 3477 3479 3481 3483 3485 3487 3489 3491 3493 3495 3497 3499 3501 3503 3505 3507 3509 3511 3513 3515 3517 3519 3521 3523 3525 3527 3529 3531 3533 3535 3537 3539 3541 3543 3545 3547 3549 3551 3553 3555 3557 3559 3561 3563 3565 3567 3569 3571 3573 3575 3577 3579 3581 3583 3585 3587 3589 3591 3593 3595 3597 3599 3601 3603 3605 3607 3609 3611 3613 3615 3617 3619 3621 3623 3625 3627 3629 3631 3633 3635 3637 3639 3641 3643 3645 3647 3649 3651 3653 3655 3657 3659 3661 3663 3665 3667 3669 3671 3673 3675 3677 3679 3681 3683 3685 3687 3689 3691 3693 3695 3697 3699 3701 3703 3705 3707 3709 3711 3713 3715 3717 3719 3721 3723 3725 3727 3729 3731 3733 3735 3737 3739 3741 3743 3745 3747 3749 3751 3753 3755 3757 3759 3761 3763 3765 3767 3769 3771 3773 3775 3777 3779 3781 3783 3785 3787 3789 3791 3793 3795 3797 3799 3801 3803 3805 3807 3809 3811 3813 3815 3817 3819 3821 3823 3825 3827 3829 3831 3833 3835 3837 3839 3841 3843 3845 3847 3849 3851 3853 3855 3857 3859 3861 3863 3865 3867 3869 3871 3873 3875 3877 3879 3881 3883 3885 3887 3889 3891 3893 3895 3897 3899 3901 3903 3905 3907 3909 3911 3913 3915 3917 3919 3921 3923 3925 3927 3929 3931 3933 3935 3937 3939 3941 3943 3945 3947 3949 3951 3953 3955 3957 3959 3961 3963 3965 3967 3969 3971 3973 3975 3977 3979 3981 3983 3985 3987 3989 3991 3993 3995 3997 3999 4001 4003 4005 4007 4009 4011 4013 4015 4017 4019 4021 4023 4025 4027 4029 4031 4033 4035 4037 4039 4041 4043 4045 4047 4049 4051 4053 4055 4057 4059 4061 4063 4065 4067 4069 4071 4073 4075 4077 4079 4081 4083 4085 4087 4089 4091 4093 4095 4097 4099 4101 4103 4105 4107 4109 4111 4113 4115 4117 4119 4121 4123 4125 4127 4129 4131 4133 4135 4137 4139 4141 4143 4145 4147 4149 4151 4153 4155 4157 4159 4161 4163 4165 4167 4169 4171 4173 4175 4177 4179 4181 4183 4185 4187 4189 4191 4193 4195 4197 4199 4201 4203 4205 4207 4209 4211 4213 4215 4217 4219 4221 4223 4225 4227 4229 4231 4233 4235 4237 4239 4241 4243 4245 4247 4249 4251 4253 4255 4257 4259 4261 4263 4265 4267 4269 4271 4273 4275 4277 4279 4281 4283 4285 4287 4289 4291 4293 4295 4297 4299 4301 4303 4305 4307 4309 4311 4313 4315 4317 4319 4321 4323 4325 4327 4329 4331 4333 4335 4337 4339 4341 4343 4345 4347 4349 4351 4353 4355 4357 4359 4361 4363 4365 4367 4369 4371 4373 4375 4377 4379 4381 4383 4385 4387 4389 4391 4393 4395 4397 4399 4401 4403 4405 4407 4409 4411 4413 4415 4417 4419 4421 4423 4425 4427 4429 4431 4433 4435 4437 4439 4441 4443 4445 4447 4449 4451 4453 4455 4457 4459 4461 4463 4465 4467 4469 4471 4473 4475 4477 4479 4481 4483 4485 4487 4489 4491 4493 4495 4497 4499 4501 4503 4505 4507 4509 4511 4513 4515 4517 4519 4521 4523 4525 4527 4529 4531 4533 4535 4537 4539 4541 4543 4545 4547 4549 4551 4553 4555 4557 4559 4561 4563 4565 4567 4569 4571 4573 4575 4577 4579 4581 4583 4585 4587 4589 4591 4593 4595 4597 4599 4601 4603 4605 4607 4609 4611 4613 4615 4617 4619 4621 4623 4625 4627 4629 4631 4633 4635 4637 4639 4641 4643 4645 4647 4649 4651 4653 4655 4657 4659 4661 4663 4665 4667 4669 4671 4673 4675 4677 4679 4681 4683 4685 4687 4689 4691 4693 4695 4697 4699 4701 4703 4705 4707 4709 4711 4713 4715 4717 4719 4721 4723 4725 4727 4729 4731 4733 4735 4737 4739 4741 4743 4745 4747 4749 4751 4753 4755 4757 4759 4761 4763 4765 4767 4769 4771 4773 4775 4777 4779 4781 4783 4785 4787 4789 4791 4793 4795 4797 4799 4801 4803 4805 4807 4809 4811 4813 4815 4817 4819 4821 4823 4825 4827 4829 4831 4833 4835 4837 4839 4841 4843 4845 4847 4849 4851 4853 4855 4857 4859 4861 4863 4865 4867 4869 4871 4873 4875 4877 4879 4881 4883 4885 4887 4889 4891 4893 4895 4897 4899 4901 4903 4905 4907 4909 4911 4913 4915 4917 4919 4921 4923 4925 4927 4929 4931 4933 4935 4937 4939 4941 4943 4945 4947 4949 4951 4953 4955 4957 4959 4961 4963 4965 4967 4969 4971 4973 4975 4977 4979 4981 4983 4985 4987 4989 4991 4993 4995 4997 4999 5001 5003 5005 5007 5009 5011 5013 5015 5017 5019 5021 5023 5025 5027 5029 5031 5033 5035 5037 5039 5041 5043 5045 5047 5049 5051 5053 5055 5057 5059 5061 5063 5065 5067 5069 5071 5073 5075 5077 5079 5081 5083 5085 5087 5089 5091 5093 5095 5097 5099 5101 5103 5105 5107 5109 5111 5113 5115 5117 5119 5121 5123 5125 5127 5129 5131 5133 5135 5137 5139 5141 5143 5

文學思想研究

フリードリッヒ・フルベリッソンの作品

山岸元宣

彼フルベリッソンの作品の中に新しい詩歌を見出したのは、サマスカ（遠く）の島からアムステルダムへ来たとき、彼の理想は神といふ女が、
ディオティマに新しい且つ完全な姿を見出したのである。

この書は、詩人として彼は始めて完成したものである。彼は
ディオティマを見た瞬間を記憶に刻みつけた。

「私は昔時、雲の光めを唯一のものを見た。而して我々が
天上の星の彼方に達した。永劫の果てまで押しやうと
完成をせよ」と感じた。実に最高のもので現れたのである。
人目の裏面の世界に現れたのである。

*Ich hab' es einmal gesehen, das einzige, das meine
seele suchte, und die Vollendung, die wir über die
Sterne hinaus entfernen, die wir hinaufschieben
bis ans Ende der Zeit, die hab' ich gegenwärtig
gefühlt; es war da, das Höchste, in diesen
Wesen der Menschennatur und der Dinge war
es da. (Gesammelte Werke. Band 11, S. 108.)*

フルベリッソンの遺言 — トヒツヤリッソ

あなたに神聖な自由を奉仕する僧におありなさい、
而して詩人としての生活が、根柢にあなたに華を咲かせます。

*Priester sollst du sein der göttlichen Natur,
und die dichterischen Tage keimen die
schon. (Gesammelte Werke, Band 11, S. 225.)*

人生生活に於て解決と支えがたき苦悶を抱いた彼は
自然の懷に身を投じ、隠者として希冀の曙光を望んだ。
この解を以て見捨てられた（過去の生活に於ける）我々の
抱負であり、また苦悶を合（や）りての憧憬である。

人生の型は深い苦悶の中に於て始めて瞳に現れた。
薄の如く、神々に我々の夢を響く。

[illegible]

170

君の心が晴々お色 飲めりたまへ。
~~春~~ 春の酒に青春を燃やし
 おー雪り言ふ花 も 胸にこして
 舞つて歌へ給へ 心の晴々お色。
 外お雪かざると いんちにはやし 和が降ふとも
 春の心を失ふがに 心行くまへに。

走の市又日

若にじつくり来たる船を
 草の邊に両手で雨を翳さず。
 花も落ちぬ水に長り草花を伏して
 国くうのまゝに春の ~~さ~~は
 水か舟の気持をのぞく
 舟か、尤も探さぬ春の文句は
 斜に降りしき雨のやにわたり sweet pe
 に筆を止してやういふ。
 舟の尤も ~~さ~~のほ其のまゝ。
 身も心も白も受へ

Xc 21

55 Feb 24/

彼に父おの自印が来る 直ぐ 封を切て 中125-板の4に中に
まっし なが 書まつ書 ばった 封は無米の父の筆で

特答。貴方が毎々私に手紙を寄せて下さる。其紙が前に到り無
きに居りますか。自動車に乗り寄は生電に便におとアルデントの無
様にして下さる。父も母も相違なくお世に生に居ります
略に 母は High school (ハイクール) 赤木工場の見習いに
一月十八日から働いて居ます。月給は 三番二十五円あります
先にあなたに上つておりであります

とまに は右はなゆしかあるが 金子を百五十兩ばかり
かにもうあていはなまいち、 てふくのやじか ところへ 垂いさ
アウな たのもしの なくしんおのつで 金のかたがた うそをぬかす
うそをぬかす まくらぬ 和も二月に百三十兩のほりくを かけ書ば
なりまらぬかす こまりて受ります
作年の中に 高玉を弗送りしたる 隆治公につかつた金は佐々木月次
本前一月迄に七百兩におります また同月に 河やふやじりる月の
おしんいす まいかう 江戸かに 来い号まナカう はいぞと書き
かきつけられども もいも つじか おるかえか 百両でもまゝあります
然る父からのお返しに 金ナカがらも 失竊したる せうたう
この 金庫の 鍵 をからうらまづには 手もとへ 垂かけた

January 28. #22 412 Douglas Fairbanks の
 "Don Q" を million dollar theatre に前用金 2 月 12
 1915 opening 2 月 12 日の P.M. 8 o'clock に theatre の前には
 無数の足踏人の行列が交通制の 4 時 30 分 2 時 30 分 1 時 30 分
 search light を光らせ 照りに

1929年12月22日
 1929年12月22日 stage Douglas Fairbanks
 1929年12月22日 may sator,
 Warner and Donald Crisp (Director)
 1929年12月22日 charles chaplin 1929年12月22日 bull fight
 1929年12月22日 spain language 1929年12月22日
 1929年12月22日 Mary Fairbanks 1929年12月22日
 Douglas 1929年12月22日 全米の半回一の美人
 1929年12月22日 1929年12月22日 stage 1929年12月22日
 1929年12月22日 chaplin 1929年12月22日 Fairbanks
 1929年12月22日 may sator 1929年12月22日

January 29th Rain 5日 和 11日 郵 書 本 方 日 上 新 知 了 喜 日 候
12 日 候 知 了。 11 日 候 知 了。 午 前 12 日 候 知 了。

[illegible]

私は鬼すー秀を1か
乙女の金貨の夢をさがしさに丹精して

④ 君のなつかしき春を君よ。

June 29

答、 $\frac{1}{2}$ より大、 $\frac{1}{2}$ より小

牛のあな
4

10517
22
あ
10517
10517

百十令

Jan 19/26

(In. What happened to Jones)

Spring の first に Mrs. & Mrs. Kameye に 今に text
に 歸作 夜 官に 随分 此を 爲に 如 ~~様~~ 此を 爲に 也。

The merciful widow 11452

mae Murray

John Gilchrist

roy D'ray

Sweet California

Sonnet - Jan. 17 1926

糸の海唇に咲いた花と都立 三十二 七人塔の海に如

腫れは霧に消えぬ 然し生の中にもあつた

人々は一変は通のやまを越え方のた。

それなのに 思ひの原の野にや 花の咲き誇る大陽の

下が「高」のた・

紙外も一筆報に喜まふ号、有る 市は新り望、平和

かべまは 水に 谷の ~~水~~ - もくの水も 尊海に 見えた

級は羽を動かす 右の足が 足より 足を動かす 足を動かす

自然を失った空にやぶをでくすの苦者なもの

整く方の瞳は 涙が 溢れ出し 思ふの花も

12. 晴々スリに土ハカ3本に(まゝ

1012

陽光。

父の群

子告，笑聲 身頃のてぬ ぬ

年未の朝、光りは すがすがしく

皆人作之也 皇天如左 皇天如右 皇天如左 皇天如右

静かな陽光は、主婦の延びた顔に土曜やがてぞ。

使此人

深き霧の中に うぐいすの 四五匹

ハクウーと掛路に草薙を好む

手を摩りながら おどおど シャッ 元気のよかたが 中子

儒、木、た、て、の、片、木、た、先、主、の、丈、く、ま、か、つ、た、靴

スル → スル中 12 第 5 次 22 番

朝霧の中から一羽の鶴

大樹の葉が 落つ。水たまりに 心を配りながら

木 ちんちん 生活 替の 海い いめちん 朝

拾二月廿三日 午後 四時 華外三街之 Catalina 街の南に於て

僕の自動車、白人のギヤ、会社の employer のために クマした。

僕も一時此の撰書の結果、左京道に赴き、其の右に於て西に取し、此の如く

務獲した 損害 100 円を 4 割

大抵、配の儘は 思ひ合ふが、一身を思ひ合ふとは、^同思ひ合ふの儘の儘に、

[illegible]

1925 年は特別僅は苦痛を 伺い、斗つ暮に 雲子 妻が 死ぬ。

知人に贈り物とあれば、近き世にすれば書めつた。其の父の永に金、

都令其生者始 指其地曰 漢 汝南 黃巾 餘一人 以 傳 予 乃 殲 之

今の肉の好む逆境を逃れたい。又運命に自分の希望を求め、重たき生を棄ててゐる。

萬所に 露をたゞの徒勞のもつたつたつた 而し一月は更に也日一日にあつた。

明日亦降發蒙如愉快已思不人 不愉并去化寒 X₁₉₆₇ 左。

人曰：「永建三年，温之生，父乃用此。」右曰：「未事，步量封之。」其一。 28/12 (1925)

[illegible]

暗汁 無き女お前の言
 労働者の靴音も荒く 悔しいお前暗汁
 焼いた時も 悲しい時も 一瞬も 一秒も 毒害無きお前
 お前土 起こし 悔かたお前
 青春の心は 自由を 色を お前では 無い
 お前は 一刻 一瞬 悔け 悔けと言ふのが 無
 寒い 暗汁が 涼い 朝倉を 道は 外の 車路士
 お前の 歩みには 泣く 業が 悔け 悔けと 歌ふ お前は
 荒野に 住むの 蛇か
 若者の 心を ばさ 暗汁の 眼

17 1017

Mary picked a little more money 又收了一点

計八人のうは 桜の maryが、女の 23に見ても 十四五に1人 22の 小娘に
やっした 昔 フイル4 毫に 敬き 敬 敬に 僞す 名 が在

Mary は 女木ね。 性格の好く女木た 東洋文化 手序 思想の発創
の 女木た者など Mary Pickford の映画は 見て 毫学に感服
た 事は無かつたが 今日迄 姓が Mary の 真傳 American

sweet heart な、理を 知つた 彼女の父 晝々々、射撃(殺)士 だった

其報を耗たすに左の如き一面は紙の量大極士人に依る。

だから、僕は信じてきた

Oct 25 (3rd Broadway) million dollar ~~the~~ hearts

小鳥士。

望みの岸太、お前はリッ貝もリッ貝も 縁の葉の上四 水に足を下して

とり胆を　くくすして　林を　あすのか　いつも　食事を　暗が

丁変 環のあがりつも 茎み を たぐり 持に

糸川がたゞてほりせせん とすみて、なむりけかいの あずさん)

其は口一杯　ほ、ほりなかつた

ヤヤんな顔 をしゝ たりとす

お前も儘に見えろ逃さず 子供のように

916

佐藤孝斗 製作 里流石 賣斗、女 6x3/2x177.6

美以 西の 小川 決り 之 概々 殆ど 全 自由 地 地 西の

心から佐賀のこゝに飾作に敬意を表せしめを記す

美、内、けん

Jim has a pilot's storehouse に見え 重中が3 西中が4州に522

4p. 或事は CP の 鉄 道 沿 道 に 在 る の 基 本 の 標 本 包 前 に 今 時 の 人 々 に

如何に考へたかを知つた。 Indian の攻撃等の中。 Nov. 8/12/17

迎

Nov 11. 午飯(水曜日) 仕事と4人: lower fieldにAを介してを以てする

彼の自叙傳に、水野吾仁人の裏面がや煙草は結構好むと

田口(見た) 代表は水野が野郎のことで die cream と食いたが。

[illegible]

未即之聲也。下町に當りて、此處に五人並んで、此處に

親の如く 説明せよ 左

Nov 14/41 吉野山雄子 寄信原上 寄一 寄一

神は、下りの舟を

別々一礼にあらす我々の悲愴を善人に見る事が出来
誰か 舟中の一人はゆかないも にくれ 蒼たし 又 良主人たりしを夢である

女大 方ア(カ かげしカキ

ト富もなかむて 花もワサ 雪の ~~海~~ 原に 夢をさめ

(山が 翠 海に) (12 Page)

人類は 初めに強はる者々 独立に又自由に生活したものであった
木の葉を拾って 飢を凌ぎ 流水を飲んで 暑を 醫して生活して當時
未だ 財産と言ふものも無く 政治社会も 起るがた
世に 生活が 精進に 苦行を 究明した 一色の 場所には 住居たり
水に 建てたに 舟 船 舟生活の 端緒を 用ひ 又 財産 所有の 萌芽を
発見に至つた 然し 土地に 境界を 劃り 所有権と言ふ物を
定め ちかた なる人々を 勝者たらしめ 正々とは 行はず
後 是 其 命なり 世に 犯罪の 跡を 追つて 至つたであらう
世に 所謂文明の 進歩に 随ひ 又 對に 人類は 墮落して
土地の 所有 財産等の 制度が 起り 政治社会の 組織され
はる 被 虐者 貧乏者 奴隷 制度等 人類の不平等を 是れた
命を 適合生活といふものは 從來 無かつた 斯ういふ 感情や 徳の 生れと 世に
罪惡も 又 萌芽を 發した

人類は 漸次 敗れ 世のものは 黄金では 無い 寧ろ 鐵と 鐵物とい
ふつた 斯う 器用の 究明 農業の 発達と共に
人類は 猪 鬃と 豪君と 別 金と 銀と 共に 併つて 反目 闘争
を せしめ 戦 亂 に 至つた

我は泣き止

我は泣き止

胸をすり抜けた

それども それども 悲しき心で上げて

血が熱いのが 胸のくたけが 如く はれけり

我は泣き止 涙も盡きて

悲しき心で 悲しき心で

心を 泣き止 涙も 尽きて

程り 程り 程り 程り 程り 程り

程り 程り 程り 程り 程り 程り

我は泣き止 涙も 尽きて。 9/22 1926

もじり

霧 浮き 街 頭 の け も は あ り

夜 明 け の 光 は ち ゑ も ち

華 々 々 々 露 は ち ゑ も ち

い め の 星 土 の ち ゑ も ち

星 土 の ち ゑ に ち ゑ も ち

日 は ち ゑ に ち ゑ も ち

華 々 々 々 引 き 星 土 の ち ゑ に ち ゑ も ち

ち ゑ も ち 人 の 知 る の 目 に ち ゑ も ち

人 の 知 る の 目 に ち ゑ も ち

人 の 知 る の 目 に ち ゑ も ち 1926/ 1976

般

大 平 洋 の 波 々 々 々 々

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

奇 奇 奇 奇

1975

1976

嘆く事ヲ

昨日は羊より手止

いかに 学べやと

今日は母のし

母は 病のなにおし たうし日ち血つしやと

いかにしるべきと

嘆く事ヲ ~~母~~ 昨日も今日も

働け ~~母~~ 仕事はかたがた

学べども 頭 重し

嘆く事ヲ 多しに 母は 泣き

涙に ちりぬ

昔年かたは 母と人とすも

日 ~~いかに~~ 苦すなり

意に 母は ~~母~~ 月は 明とて

青白く 母の 去たつを見つめぬ

白雪の 見ゆと 母は 泣き

あけも 母は 泣き 泣き

泣き 泣き 母を 思ふ 羊を 思ふ

母に 母に 一過 ~~母~~ 母の 母の

変人を 境りし ~~母~~ 境り

母は 白き 片 母を 母を

かき かく

嘆く事ヲ 多しに 待つ 母は 来る

X013

4/28/1911

秋のちりぬ

秋は ありぬ

落葉の ましき

星の まるめく 多し

月の ラチケル

大い 沈の 母に

おれは 母の 母に 母に

母は 母に 母に 母に 母に

~~母は~~ 母は 母に 母に 母に 母に

母は 母に 母に 母に 母に

母は 母に 母に 母に 母に

X014

4/28/1911

北は

量天の海朝唐の

頭が空たの

あつたをに見て

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

1921

1921

9/28. 1921

落し文

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

たがの力をにのこ

1922

9/28 1921

或判官以婦人乞判乞乞. 12 子.

(貴女は未だ結婚 なかった事はありませんか)

美人 (ハイ未福であります)

判官(2人)は無罪に致した

判官 一書糾注之罪考以白，之

(吾には夫人が最も好き。)

手紙 (ありお)

判書 是では残念でだが法の富がゆえに 従つて何十年の替廻を
申し渡す

諸君面白くして、——如何にぞ

菌に2 茎を(六)を握る

新加 日本人 新報 毎日 盟から 1941年 九月 廿三日 に 常置 置を 用くとす。
また 大新 文大 運動 会を 用いとす。

貝崇國為教如去

佐岩の手紙 全集に いてのそ 当分の 仕事 自筆のし にあつたつたの
事。一か一かなが 市立の 領事と 同僚の 幸 生書とにいはす
は今のところから 事と といひが 會長の 又一 面 手紙の
大里村 なり。

誰か言ふ。秋中は、 53×10 空の元陽が、 12

小、猫を45% 分子の髪に

大まづ 虫世をのりほらん

羅に江キ血の流本はた身の是なり

同とて了りし。

誰か言ふ、可登るいゝを

是12月12日
王明

ずー何とまー さいろつ 事おー

今日も 秋に 禮美 社を 聞く

はなまりも めい¹²で 中か子と、と

誰か言ふ、我が心。

矢口、~~東也~~ 15左 知 3丁字~~東也~~ 也

何一放浪の身の何一

~~カニ~~ 物草に喰ふ金土へも 巻今氣の後川にか電キ身ミの

蜂の巣を置く方

人形をいかに愛するをも

小外巻の巻を九に打考たりき

3 白田に陸かき人あす

詩かきの、我にまじりし人幸なり

X010

Sept. 26. f

理規のあて

野に杉木が立ち 冬、草のナノ花の甘き香を分けた
僕 は毎日 雑の足音に 春の足音を 聞かされた。 —
柳の葉は 田舎の 端の 花の 香を 分けた。 —

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

柳の葉を 手に 取った。 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

9/18 1925

幾の春秋

幾の春秋の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

18/9 1925

春の足音

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音 春の足音

15/9 1925

1009

他上の一歩 自分はこの題 [世上の一片] の下に一紙 曲か小説を書きたく
思つて居る 其必要は 草紙 第4の (世上の狂人) や (父 歸) の様に一
一著物な 短編か。

自分か又文壇に参り出すには 2312 までの内に 書か 発表す
必要があつた 唯一 = 筆の 奮心の 作を。 —

K. A. I. — dance — will speak — ドースや 鐘 乾す。
九月十一日

過去一

おー 句の 暑つた。 おー 焼きつゝ 探太
どう 一人 持ち 集まつた 友 一 頭 大 重たい
お 旅 草の中から 水が 流す 45
皇 島大。 お前 さん どの 無心に 土を 動かす 733
お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

二本か 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

(お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ)

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

九月十七日 書

お 前 さん 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ 喰ひ

昭和 Oct 2nd.

Y008

モーバツサン (バツ) (女の一生)

エーデルツラ (ナナ) 父田の血統により墮落する女性の一生を書く

4224オ (死の勝利)

エレキム (黄金と結婚) (小児の世紀) (女性の経歴)

聖文苑の

耶蘇道 序論 耶蘇道は神聖にあり一儀オミヤにあり
耶蘇道は人道なり 天道なり 人道と天道は同一のものなり

儀文は教し聖は性かす一使徒オムク
雪の結晶は悉く六十六度或は五十二度の角度を持つ

パスカルの言 (人目は鼻の様に弱く鼻は目より鋭い)

社会の各事物は悉く比較的価値あるものに依り自己の直接関係あり
と云ふが事 重要なるものなり

(若し葉に (汝は根に完全なり) と問はば

(吾が生命は根にあり) と答へば 根に同はば

吾が生命は幹にあり) と答へば

幹は吾が生命は根にあり) と答へば 根に同はば

吾が生命は幹と枝と葉にあり 吾木より葉を取り

吾は吾木は死なん 人生の大樹又世に 完全純粹に

獨立自主するものはあり

ハウプトマンの(僧侶夢)の寓意は最愛の妻に裏切られた男の苦しみ

耐えがたき 女が男の苦しみは 高き梯子を登つて居る 昔のヤシは

一旦登つた者必し降りるものなり 降りるは女に此種なり

夢を登るなかつた 昔の女は 夢を登つた と言つて是

一旦執着 (女は) 深く心に留め置いて 女は女に 夢を登るものなり

ルクス、エクス、オリエンテ 光は東方より来る

作家と作品

グンター 詩人 (1265-1321) フロレンスに生れラウエーナに
至す 神曲は有名な

ゲーテ (若きウエルテルの悩み) (ファウスト)

リヒャルト・ワグネル (1813-1883) 勿論 彼の 音楽に生れイタリ
アのウエーグは喜ぶ
(飛び行くオランダ人) (タイタニク)

イブセン (杜鰲の柱) (人形の家) (也 重) (海つ夫人)
(少年文豪の父) ノルウェー (12スミス夫人)

ハッセル (ユウテック) (アリヤアグダールネ) (プロデス、アリヤネ)
(1813-63) デンマルクに生れ 34歳に死す
(ガイゲスと彼の指環)

ゾラ (世界若
オードレール - 雲の華)

ザン・ハルト・ハウプトマン (1862-) 独逸
(救世の人々) 1891 (沈黙) 1896 (ハルネの昇天) 1895
(駁者 1891) (紳匠) 1892.

ノーデルマル (故郷)
バーナード ハッ (ラッシュと人の群衆)
ビョルンソン (手袋) (若き葡萄の花咲く頃)

モーリス メテルク 白草集 (モナリザ)
ストリムゲル 伯爵令嬢スリノ

オスカール・ワイルド カン (王と王妃) と昔王の妃とヨフナの隠れ家

ラエデキム (春の目 醒) (一 2 4 5 6 7 8 9 10 11 12) (地盤)

近世小説

ツルゲネーフ (ルーザン) (其前夜) (~~オウター夫人~~)

ギヌスタフ・フローベル 俳諧の良き妻 (おウター夫人)

一昨より昨日今朝に於て二回（？）
 夢を見ふ。此の昔の前兆の如し。
 幸いに善い。此の昔の事との如し。一何二十の如
 （おは）今病あり。身も心も苦しく。平ニ其の昔の如くに
 千針一日の如く。佛く必に知り。ノ歩く。悪道に引くら
 本に流木。昔々行く自分を知つて。浮き上り。
 鬼の重きは知らぬ。意先の弱る答に。一日。日よう。浮き上り。
 人生の行路は何なる。此を思ひ出た。身の命。如何にもやうも。
 取りかつかつか。望み無し。ば無き力。
 人が何を言ふ。身が進まう。思つた。按に。よ本女。あな
 人生は。人生の木。思ひ出た。遊びも。浮き上り。思つて。
 何と。ヤ。言ひ出し。物事ばかり。世が変り。
 若しも。無き。億加。鬼の。面になつた。自分。知らぬ。

[illegible]

今判書等四より地をわかれた。白人が牛を事し、牛車、牛の鏡に言つた
 が申信申（延）に、牛を事し、牛車、牛の鏡に言つた。牛車、牛の鏡に言つた
 と、このあたから、あたり、大さな、鬼の、御子、保生、其時、新
 屋、之、鏡、が、あつた、の、を、鬼、う、た、る、い、つ、た、牛、牧、自、勤、事、を、買、ひ、に
 買、中、者、は、う、う、り、の、言、ひ、た、こ、思、つ、た、こ、だ、牛、牧、自、勤、事、を、買、ひ、に
 保、生、を、ま、か、せ、た、五、百、三、十、八、十、二、仙、の、フ、ー、オ、の、品、を、さ、る、い、と
 買、ひ、つ、た、い、と、小、か、り、鏡、等、は、面、白、く、赤、う、じ、に、事、や、牛、車、を、お、ろ、う
 自、勤、事、は、事、長、倉、庫、が、無、う、い、大、平、に、た、い、明、早、明、早、に
 牛、車、を、わ、り、あ、る、と、い、言、学、困、つ、た、事、だ、平、日、
 平、日、

同格也。年々七場事。買ひて。儼は。芳中へ告たう
 体中あう。水々を。飯やあう。小野君の。室にへつたう
 吉野君。山部。車中。後。心。多。ウイスキ。を。キラント。
 何いことを前に。話して。大い。さ。音。被。美大まを。か。い。音。
 意を。四人の。聲。官に。お。あ。け。て。ま。え。た。か。二人は。正。服。を。着。
 人。は。普。通。服。で。い。う。さ。重。も。お。事。ぬ。現。行。七。や。う。か。
 此。水。部。君。は。お。し。行。き。に。な。つ。た。持。に。美。目。物。を。美。目。物。で。
 之。活。と。見。や。う。は。無。つ。か。し。い。事。は。事。に。な。り。
 活。い。大。十。井。主。親。と。う。か。事。は。さ。ん。だ。宅。障。女。等。の。思。心。
 には。皆。あ。わ。る。と。解。な。い。女。等。は。金。を。取。り。に。事。は。い。う。事。は。い。う。事。
 斗。身。と。や。う。か。事。第。国。の。官。吏。は。袖。の。下。の。一。キ。お。女。等。は。
 少。女。の。い。う。か。
 儼は。始。め。女。等。の。い。う。か。思。心。込。む。の。に。お。合。つ。た。あ。重。さ。つ。事。な。つ。た。
 又。思。ひ。い。う。か。も。あ。つ。た。
 書。き。う。思。心。筆。を。取。主。の。金。リ。い。う。か。下。手。方。の。儼。自。身。取。り。持。
 夜。は。前。月。曜。日。九。十。六。七。夜。の。男。等。の。思。心。

五月三日に上野老年會の郊遊會を持つた事だ。發車して居る
中が健は新事の上めを一言身會へて置いた。後員にマダリ
等。言ふ事がある事。
身會の土也。集數の回顧も金無き為に終結未だつめ
のには五百円かゝり。其を以て、どうするや。必要があるか。この
ふなう。帳に修府をすす。見よ。在り。他はキツの各々事を
言はせも。同。此。不。文。在。な。う。と。十二。各。に。示。す。も。可。い。
健は新事の上めを理由も現存の紙の裏の引紙が、い。や。其。の。に。

日午後十時を過ぐし、静にあり憩ふなり。一
 欧州の大戦の一落果　　米軍は此の休戦記念日、我々も
 の甚き生霊は異仲の山川に降りて死すの生命は糧キ
 悲痛のいゝ底に――泣キ――事か　　戦は罪惡なりとは、遂に午
 古く愛の名言なるヤコブ今日の世界の勢きを其に見なば、予こむろ
 定ちもわうさるゝにあらずや　　平時の武蓋は――
 軍事秘密はあり戰艦あるも、兵備は雨の世界の谷をそと
 隠キあるやうの日近きにあらんこと、故聖人書の中に
 世界の平和に盡すの大偉人の出現を中にも預らんか
 余は今靜に期する所あり、此は一事を止め此の意未
 るき　　日をたしやえこそす
 持参艦　　スエーデンには酒を飲みに出かけることに自動車にて行く
 然し残念にも艦は我等同胞を救ひ出し、遂に短時間の
 外に不艦して、いつとも失せよう中に歸水す
 明日午前十一時ごろ、サウセを方へ歸ル　　艦キヤネオンに上り青年会主催
 大野旅館を用ゐんとす　　午前十一時に式――

更にく 夜は 靜に — 水牛行く、リバー 銀をんこす 名ト
 晩春の、一今夜 夏やに 早星霜 — 思ふ余りて
 雄心 何うく 我は 付かんとすも 雪より 灰方うや
 雄心 費り 余の 此の 心事を 解す者ぞ
 雄神は 永年 我が 心を守ふ

昨夜 吉野七郎代より「病氣にはお
に付ー」宅内に来つゝ事をいおもね電
話にて 要井 来る。

何月にもなつかは 三日も 何日も 啼り 泣きた 霞 才一日 移日を
 かへなりのしまつた 平前中に 洗濯や 色を五二回 何れも仕事な
 しやうと思ふ 居る右のには 又 何れも 持参の中か 外の 夫れを 受けあう
 といふか 流し 小 落すの はやしし 音に 美味の良こと やが 笑えり 女が
 九時迄に 抱きた 何れも 晝が 晴れ 外は 雨に もう 能はし
 持に 思ふ 小 遠き 氣の 方 心へ 五目と あり かつ 右の 當に
 うさし ばつー せば 夫れ 氣の 方 浮も 文も 先 是等 にと 持つ
 とへには ありし 鳴

五月十八日
雨
日記
と書
く
筆
を
取
た。

第一走馬一やう

保赤久月云々の交々書半に
 御向し遊んだらう今外も見入
 子々をやり自勤事を買ふ事
 シュライアの大倉の羅子で
 の層買ふ事々々々々々々々々
 膳物は米国の飛更を生る
 ねえささ
 おうへや
 短のスカーフ
 能のあたに
 自勤事
 遊の事は米国人の所には
 米国人の生活はあり
 生命はあり
 昨日随分

度夫事ニ斜傷_レ居_レ而_レ得_レ所は自_レ無_レた_レ性_レ女_レ未_レニ今_レ身_レの生_レ輝_レ營_レ
 其_レ悲_レ光_レ之_レ前_レ逢_レの苦_レ回_レ更_レに現_レ在_レの自_レの
 事_レ事_レ之_レ傷_レく事_レ僕_レは_レ子_レの爲_レに_レ度_レ井_レに_レ傷_レいた_レの如_レく_レ今_レの
 自_レ身_レ之_レ思_レひ保_レた_レ歸_レ事_レの_レ一_レた_レ當_レに_レ而_レ今_レを_レ生_レむ_レ
 事_レ之_レ出_レ来_レ、如_レく_レ

親の一生を後悔して眼に苦しみ傷つけられ
悲しみに涙するより、
人々の生きたる生活の中にも、
健やかに父を養ひて兄弟等を前途に将来を交付せしむ事。おろそ
父兄の愛を過渡は本能的に言ふなり——
父兄にもう延べる必要なきもの

[illegible]

和世 今更に多く学校が新学期に入つたと思ふ。無事の備へや
 無事 知つた生等の 備へ有。先を更に成す事なす
 国より 前より 多幸ある事と 預る者ありませう
 君に 少親をなす 隆く之が成功を祈す

毛に私は不可有と誨むを得る

地方官吏は平素如く、和軍から邦事を、市の使を以て、
底意を以て判官する。邊を以て判官する。其主筆は大臣にあり、
又いふと、何等其人等、也を以て世は、陸軍を以て、
かの如く、一般に、有つても無き、如く、
是に、人々の、理を以て、ある、こゝに、
不可なる、如く、ある、いふ、あり

自己の炭火の燈に子を懐妊にするからであります
 其の意、神創は、思ふ外生の物の依の心腹が無く存に 其のより
 此の神々言ふにたからまうに思ふのまゝに 夜まかりをやる
 この戒書に大事と書かあるを思ふ
 我が婦人を取檻を云ふは 今日の法堂の語をも又田姓よとの人程の
 事候を云ふから由りまゝに 此の不可なるは 神を信するまゝに
 まゝ
 ように 取檻名ある満喜は 婦人 夢の檻の不可なる 物の近に
 此の戒書に本人事を云ふ程に 取檻を云ふは

晉平公

戦争はこれに
破壊するが
父日の
修養の
日を要する
之を言うて居た
海路を

三六 金 辰 二 月 未

男 子 乙 亥 年 十 月 廿 五 日 生 女 子 乙 亥 年 十 月 廿 五 日 生

石井 蓮 子 人

彼は帰りにしる人
彼は故きぬ 亡き一なる

いくやに 刻用刻は 寂寥に
吾き跡の 痕をこ

しる人 勝の 跡をけ
船の ぼりとす

熱に
もたへける

是を 子やしあ 精も
魂の ありしやん 西

バツ左リ やかに たけり
眼は ぼろと 身は 重なり

真の 世言の中に けしき
白くは けしき

鉄意に
洋子 彼の 心すを

潤りし 身すを 叫びて
は けしき けしき

しる人
おとかり いなづか

二月 白

0.6

(L.A. Jap. Am.)

Moshe

Elisabetta

乙女は守りたまふ 夜の静けに手組に
甘く花は薫る 輝く光を手に
岸にも来ぬ 船が 荒海から港を去る 標に
悲しみに 満ちた 船の 静けに いやさる

白雲は羽の如く 乙女は笑ひて

乙女の前身は 花の如く 芳しき

花も 芳し

花の名の如く には 花に 大膽な 花の如く 花の如く

乙女の しのび 花の 花の 花の 花の

やすこ 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

二月二十日

石井 花の 花の 花の 花の

二月二十日

二月二十日

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

乙女は 花の 花の 花の 花の

X005

張

[illegible][illegible]

ほうくは筆をせうと
 思ひ
 方々
 如何にたり
 新常儀の果
 鳴しはなげもなめも
 働けり
 昔も
 あり
 今
 是は
 人々
 紅い
 せり

11/25/20

X003

刀古者 頃う 兎う 牛は
我々 天より 下り
祖無改 婚す

升加島 役女 25 24 23 22

つゝいふ女の語をいふれ
信のあつたをいふれ

4に
 5の
 6の
 7の
 8の
 9の
 10の
 11の
 12の
 13の
 14の
 15の
 16の
 17の
 18の
 19の
 20の
 21の
 22の
 23の
 24の
 25の
 26の
 27の
 28の
 29の
 30の
 31の
 32の
 33の
 34の
 35の
 36の
 37の
 38の
 39の
 40の
 41の
 42の
 43の
 44の
 45の
 46の
 47の
 48の
 49の
 50の
 51の
 52の
 53の
 54の
 55の
 56の
 57の
 58の
 59の
 60の
 61の
 62の
 63の
 64の
 65の
 66の
 67の
 68の
 69の
 70の
 71の
 72の
 73の
 74の
 75の
 76の
 77の
 78の
 79の
 80の
 81の
 82の
 83の
 84の
 85の
 86の
 87の
 88の
 89の
 90の
 91の
 92の
 93の
 94の
 95の
 96の
 97の
 98の
 99の
 100の
 101の
 102の
 103の
 104の
 105の
 106の
 107の
 108の
 109の
 110の
 111の
 112の
 113の
 114の
 115の
 116の
 117の
 118の
 119の
 120の
 121の
 122の
 123の
 124の
 125の
 126の
 127の
 128の
 129の
 130の
 131の
 132の
 133の
 134の
 135の
 136の
 137の
 138の
 139の
 140の
 141の
 142の
 143の
 144の
 145の
 146の
 147の
 148の
 149の
 150の
 151の
 152の
 153の
 154の
 155の
 156の
 157の
 158の
 159の
 160の
 161の
 162の
 163の
 164の
 165の
 166の
 167の
 168の
 169の
 170の
 171の
 172の
 173の
 174の
 175の
 176の
 177の
 178の
 179の
 180の
 181の
 182の
 183の
 184の
 185の
 186の
 187の
 188の
 189の
 190の
 191の
 192の
 193の
 194の
 195の
 196の
 197の
 198の
 199の
 200の
 201の
 202の
 203の
 204の
 205の
 206の
 207の
 208の
 209の
 210の
 211の
 212の
 213の
 214の
 215の
 216の
 217の
 218の
 219の
 220の
 221の
 222の
 223の
 224の
 225の
 226の
 227の
 228の
 229の
 230の
 231の
 232の
 233の
 234の
 235の
 236の
 237の
 238の
 239の
 240の
 241の
 242の
 243の
 244の
 245の
 246の
 247の
 248の
 249の
 250の
 251の
 252の
 253の
 254の
 255の
 256の
 257の
 258の
 259の
 260の
 261の
 262の
 263の
 264の
 265の
 266の
 267の
 268の
 269の
 270の
 271の
 272の
 273の
 274の
 275の
 276の
 277の
 278の
 279の
 280の
 281の
 282の
 283の
 284の
 285の
 286の
 287の
 288の
 289の
 290の
 291の
 292の
 293の
 294の
 295の
 296の
 297の
 298の
 299の
 300の
 301の
 302の
 303の
 304の
 305の
 306の
 307の
 308の
 309の
 310の
 311の
 312の
 313の
 314の
 315の
 316の
 317の
 318の
 319の
 320の
 321の
 322の
 323の
 324の
 325の
 326の
 327の
 328の
 329の
 330の
 331の
 332の
 333の
 334の
 335の
 336の
 337の
 338の
 339の
 340の
 341の
 342の
 343の
 344の
 345の
 346の
 347の
 348の
 349の
 350の
 351の
 352の
 353の
 354の
 355の
 356の
 357の
 358の
 359の
 360の
 361の
 362の
 363の
 364の
 365の
 366の
 367の
 368の
 369の
 370の
 371の
 372の
 373の
 374の
 375の
 376の
 377の
 378の
 379の
 380の
 381の
 382の
 383の
 384の
 385の
 386の
 387の
 388の
 389の
 390の
 391の
 392の
 393の
 394の
 395の
 396の
 397の
 398の
 399の
 400の
 401の
 402の
 403の
 404の
 405の
 406の
 407の
 408の
 409の
 410の
 411の
 412の
 413の
 414の
 415の
 416の
 417の
 418の
 419の
 420の
 421の
 422の
 423の
 424の
 425の
 426の
 427の
 428の
 429の
 430の
 431の
 432の
 433の
 434の
 435の
 436の
 437の
 438の
 439の
 440の
 441の
 442の
 443の
 444の
 445の
 446の
 447の
 448の
 449の
 450の
 451の
 452の
 453の
 454の
 455の
 456の
 457の
 458の
 459の
 460の
 461の
 462の
 463の
 464の
 465の
 466の
 467の
 468の
 469の

月日
満
在
女
に

花
吐
あ
は

雪のち、の
ゆめ

[illegible]

カ、コ、ク、ケ、コ、モ、ハ、ヘ、ホ、ニ、ヒ、フ、マ、ス、ト、メ、ナ、フ

田子
東山

君の書に
合ふ

引くのを手とせ

[illegible]

曉
不
去
如
子
厚
二
日
十
日

卷之六

紅
ら
ー
の
番
々
々

免
主
外
に
ひ
ま
り
手
よ

卷之二

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

水 燈 火 渡 舟 也 止

五山文
士

47
和
2
5-

見
フ
コ
バ
盤
乙
煎

21

X004

望子成龍

此
子

此
了
多
力

世にあらはれしつゝ中

事幸の 其国に見えし

過りぬ 旅人來ぬ

僅か知るの 差さして

此旅白に 旅人來ぬ

此の期待を 成ぬ

事 方新し 差さして

日中に 旅人來ぬ

明日を 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

元人 旅人來ぬ

思ふ 旅人來ぬ

傳ふ 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

魂白き 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

此の 旅人來ぬ

乙巳

唯今二月にす 明日は紀元新紀にす 此一以の 排異形 国 抄等
 其 傷 者 には 以の 美し、 蒙 曰 也、 祝す、 幸が 九 年 未 だ
 也 未 同 胞 是 遊 嬉 友 生 消 ち へ 居 者 ち あり

三に於ては、
孝氣は心の
道々、其は
六ヶ敷ひと
其の
三

のききは
ササの
花の
咲きた
鉄に
ツ
ソ
に
カ
一

吟唱
何々言
苦心
考の
博
藝
乙
何人
古
手
筆
一
や
か

大いなる無量の喜びを占める

星書己う やめは 大衆の ほとり 操り せむすゝに

山に
 里に
 歌
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

米因下
郡山
ツツ
見
透

美斗志一佐のまふ

此は多分、由
自然花は少き
句の言ひを
加ゆの名
此はまづ

主飛ひのの無むのの土つち

徳はまかこみ、常方に持てゐる。過剰な愛は

すまの 半が 焼 登 上 好 急 重に 度 子 子 子

歸
 り
 たい
 悔
 な
 し
 かに
 おう
 思
 は
 し
 世
 呪
 言
 中
 12

半国に奉じ、同胞の之に如め、同胞の苦悩を解き、変遷を境、翹て

上
之
月
日
色
在
事
件
に
あ
る
人
々
の
名
を
考
へ
た

新之世に
不変の中は
堅固な
此を同胞
生活の
必要

に
なるには
この大書
解つて来
予期せよ

事を考へ、事は一まじう、今和江料を持て来是、タム川相有

牛乳
 18
 他
 日の
 空
 に
 こころ
 書
 き
 つ
 り
 の
 び
 ず

手紙の
梅に
書き
きた
感想
日記の
一冊
を見

在程にはあり未足

衡に
 あきつ
 一
 事位
 位
 左
 三
 の
 弓
 得
 好
 好
 大

[illegible]

市
偶
答
／
股
大
も
い
力
し
白
上
し
病
風
主
に
整
一
正
は
う

此金匱良方以治人標曰小兒驚風目之同外定

待こ 牧に 比喩の 大改業を 奏行す べきに 思ふ

一
十
三

蠟

川 1. 13. の

コーロキニウヤロ

あつて子けたや春の夜の

霞まぶ 日向ちれを

おもあふく 輝やを

心は清きこぞ

神にカシ高きソローは

テオオノ オーニカもも

コーロキニウヤロ

ハイカ一四 輝やを

やだこ和は 霞の用じやれ

なをた替を下にこぞ

まいだじめた

リノヤンマリマ

和は ~~シキリハ~~ シキリハ夏の

エツリ物出で

ニキリこころをさつた

パシアル

娘は オロコをこぞ

おもを辨すこ

傷をぬぐが又 霞にまつた

娘は んんが 前に ニミオオトキを 悔やなく

望まふまを 前の ぬきこ 元を 辨す

いくく 物やを

和のコーロキヤン 霞の 下

板の 断末 翫を 見おろ 霞を 下

老いの なり 経た

和のコーロキヤン 霞の 下

娘は 之を 辨す

ハネを じやい 霞に ぬき

その口を 是を 霞に ぬき

口を ぬき 霞に ぬき

娘は 霞に ぬき

和を ぬき 霞に ぬき

和の わつかは 霞に ぬき

和の わつかは 霞に ぬき

しりくすし

和の わつかは 霞に ぬき

和の わつかは 霞に ぬき

和の わつかは 霞に ぬき

和の わつかは 霞に ぬき

和の わつかは 霞に ぬき

和の わつかは 霞に ぬき

和の わつかは 霞に ぬき

4002

花鳥

舟は夕 暁、さ 春の画面を 眺め 眺め 眺め

舟に 帆子。面を

僕に 君の 思ふ 僕人の 心

思ふ 君の 思ふ 君の

現 君の 自由の 心 意 意 意 意

未来の 希望に 大い 大い 大い 大い

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

僕に 君の 心 意 意 意 意

山に 舟一

舟一

収め女 心

心あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

女

→4

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

長年の中 なま

たまに

櫻さう 船にのりぬ
ふの 晴るーやうふく

船を 見やうぬ
鬼 さいやに

はまは さいぬ

砂 だらうや

背 常きふに 竹に 植さる

思を 結ふ

こめを 結ふ

後の 噂

船を 見やうぬ

借き 船の さいふふ

来 き

長書 なが

牛け 書 うし

わーん は 宅さぬ

幸 地の 故に

人々 知とや

幸 何の ぼん

春を 知りこ

和さぬ せう

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

春の 眼を 睨み

船に乘る大平洋を渡す毎に
書き事無し一無限に神境
空相にあけし屋長

ス
リ
ン
ク
ハ

$$\frac{1}{2} \sqrt{2}$$

鹿に
お
か
か
へ
居
た

口
々
々
境
走
一
二

しまつた
思つた
詩

あ
前
は
明
日
か
ら
来
な
う
も
良
い
よ

主人が此へ来

丁
度
12
第4
12
提
1
1

い
か
め
ー
つ
け
と
垂
た

清
壺の
鐘（トウラ）
は

廿五
胎行
胎を
来し
変へ

船來之待之乎，梅

急心が 作み ~~極~~ 極
 熱く なつた 思ふ 時

淫行類

44
10
子
8
2
;
2
10
~~10~~
~~20~~
10
2

もういふことはない
 海の上の方

満ちたる心はくち
けりても
狂みばかり

謝はたが燈を流す。

日
 好
 12
 2
 1
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12

眼
口
~~心~~
衣

カ
記
志
も
詩
娘
り
者

二月廿二日

女工のあはれ

半は
か
た
き
の
目
ふ
る

廿五ノ
ホ
一
二

牛の
お
2
3
人
い
居

女を修めたい

恒も同に入らざるや
何に

拾遺傳に
あまの
あまの
あまの

答 奥 文 下 米 一 斗 五 升

利は矢、張造の共同を知る

110.

羅子上所書針金 會長 池田やどり
幹事にな、梅に推さ、 僕も上七得ず交れた、

七 芳佛若

無情其ねた 日の天に
シシと傳く若者の聲に

遠き處無しの玉の汗をしほらす。

は層の串面も照り出す。

少の書斜の父は如何に

彼の成功と幸福を祈るが

彼から見ぬ妻は何ぞ

今は無き父の運命に泣く

眺る梅に

丹はこれ為木になわ

今は地下に眠るには

日夜奮闘

失望と憤恨

汗をふく汗を流す

人々の文庫

は層の無情

若物の此方佛の軍に

革命の言 暗雲が夜を

貫き通す 高きも

いやさう、群の中に

羊の子の梅にちりめ事な

上言に上言木め 所上は 草

おやッ 傷く用カ

終日雨露が降り流る

雲が無くなり 雨は雪

こ木がぬえりあ 正月の白

1901

支那の支

at January 1825

Dear Mr. Perkins

I wish a happy new year,

1/2 cord, half
1/5 measure

15. Morning

② 松子屋の梅の雪

同山寺古寺 同山寺古寺

△お、一君、望の号は、何うだい、何だい、洗に

其のほけ
師 菅上
考 勝うし
富 友山

事 其のトハス 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一、子孫之盛衰，全視其家之興廢。故君子必先慎乎德。有德此有人，有人此有土，有土此有財，有財此有用。德者本也，財者末也。外本而求末，必民散而國亡。故古之王者，必先慎乎德。有德此有人，有人此有土，有土此有財，有財此有用。德者本也，財者末也。外本而求末，必民散而國亡。故古之王者，必先慎乎德。

[illegible][illegible][illegible]

生々々々々々々々々々々々

名
世
里
里
地
水
乃
あまの
面

身のおまへは、おきこえ、おれ、おれ

其の(と)きいす二刻
其の(と)きいす二刻

も昔々事は心の底にこそある

10
22
3
1940
C
L

李
上
等
号

17/2/20

母 つかさどるの母
諸君の志
大層の志
物の上をまた

ナインの娘
エい知れ文明と信じては

物 雲の氣は 晴れ渡る空に
物 人生は 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

志 晴れ渡る空に
志 晴れ渡る空に

申傳はよみかたにまゝ
二二

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信の言を教へて
臨の氣力を作

信仰の影には何れも影がひく人い居る

船等の生活に無きものなるが故に 沖へ出るには 船を 離る 信仰心いす

而し信仰の裏には 罪惡の 影が かくれ 其の 影の 下に 居る。

又 是れ 金や 力なりや 永が 居る 影には 罪惡 影なり 是れ 必要なる

「聖書」や 云ふ 人知も 大なる 船は 影の 下に 居る 影の 下に 居る

かへつて 四柱に 落ち 下り 影の 下に 居る 影の 下に 居る 一人の 影に

進もうと して 走り 回り 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

歩む 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

大きな 事業には 大きな 用意が 必要なる 影の 下に 居る 影の 下に 居る

人 回ると 生活する 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

或時 信仰の 影は 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

是に 船に 出た 信仰の 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

まゝ 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

考へて 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

朝九が 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る 影の 下に 居る

1925

交筆也
 世管也
 下
 まるゝ
 此こそ
 詩筆をわし
 當ふ
 おそめ
 はまう
 まえかろ
 る
 我々も
 吾等
 手身は
 吾等の
 才力の
 カに
 信仰せ
 樽酒の
 まつ
 月曜を
 期
 こ
 其
 既深
 う
 は
 其れ
 まるゝ
 つとめ
 まるゝ
 乃つて
 詩を
 けり
 と
 清き
 な
 し
 立
 ち
 まるゝ

おれとてこの御心は
定むの程は云々云々

瑞雲
 瑞雲のふりかへる山に
 瑞雲のふりかへる山に
 瑞雲のふりかへる山に
 瑞雲のふりかへる山に
 瑞雲のふりかへる山に

難立の人よりかゝり
ふきのやうにほろろ

大経の序の
 大経の序の
 大経の序の

[illegible]

幾
 同
 規
 長
 作
 輝
 也
 其
 外
 中
 子
 後
 其
 後
 中
 廣
 古
 甲
 五
 五

正義の故にあつては
沙の平あつては、
世に人知れぬ所あり

力に倍返し

此乃金之子也

\$279.20

市の王国

新米 依 係

[illegible]

可也
此書

煙霞

主は十字架上に苦しみを受けさせ
給ふ爲に來られたのでは無く實に

[illegible]

金匱要略
（神女王）
俗音 命梅に些をすのハ新
（廿）
心開言 口臨 又ハミ達
金匱大淵我々爾ナニセ書家
一四二回（一）五

[illegible]

4 合ニテ身ノ元日括弧カクハナ
 前紅江の如く悲達者
 なり也(知)し事ヤ
 誰れも(即)に人オの元口セ(知)つたは
 此はあふりたるおもひなりゆきサレバの元口セナリしい
 夜いせアキの道え中を歩けり(思)ふやうな
 と情来のうけの台のこ

丹國の
 丹や
 作
 元
 文
 年
 は

申を
 弟中
 急
 事
 梅

余は、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

芝生に筆を添く

4 2 7 3

晉文公十一

齊白石

王成

日本人心

其国の諸君

私は日本に於て日本人の如く下は一考を以て考へてあります

其の第一は日本及び日本人に付ては或は諸君の理想を告る

事なり

日本

日本人に付て

我々日本人が何事を行ふに當りては我々の理想の中を去る又自由主義の理想

なる事自らは自由大和民族に於て是を重んずる事である

今日の世に於ては此等の或るの变化に於て我々日本人の理想

言はるべきや大和民族は必ずしも其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

例を申しますと大和民族は其の理想に於ては其の理想に於ては

展の決心の長崎 古正格 三斗 十二月十一日 羅の日事 日西に所在
表す 社子の内閣 林田 雪彦 一

短氣
短氣
少陰。皆
利。

一、
書道
の
考
の
旨
師
2
女
2
男
2
女

支那の革命

一、骨針、煙囪、煤力、天、建造、行、信、建、合、有、

一
乙中を記し、
如き人合は、
叙答の一端を
毛丁にす。市

乙日(子)申
其のヤ田の其齋其妻乙白未夢の五
其のヤ田の其齋其妻乙白未夢の五

冬に
 其の
 人の
 一を
 持て
 遊を
 三三
 以上
 一と
 めの
 事

人愛之 其中心に 此の 精神に 其の 二十世紀を 思ふ

一陸士中
二書翰の
三其生
四其生
五其生
六其生
七其生
八其生
九其生
十其生
十一其生
十二其生
十三其生
十四其生
十五其生
十六其生
十七其生
十八其生
十九其生
二十其生
二十一其生
二十二其生
二十三其生
二十四其生
二十五其生
二十六其生
二十七其生
二十八其生
二十九其生
三十其生
三十一其生
三十二其生
三十三其生
三十四其生
三十五其生
三十六其生
三十七其生
三十八其生
三十九其生
四十其生
四十一其生
四十二其生
四十三其生
四十四其生
四十五其生
四十六其生
四十七其生
四十八其生
四十九其生
五十其生
五十一其生
五十二其生
五十三其生
五十四其生
五十五其生
五十六其生
五十七其生
五十八其生
五十九其生
六十其生
六十一其生
六十二其生
六十三其生
六十四其生
六十五其生
六十六其生
六十七其生
六十八其生
六十九其生
七十其生
七十一其生
七十二其生
七十三其生
七十四其生
七十五其生
七十六其生
七十七其生
七十八其生
七十九其生
八十其生
八十一其生
八十二其生
八十三其生
八十四其生
八十五其生
八十六其生
八十七其生
八十八其生
八十九其生
九十其生
九十一其生
九十二其生
九十三其生
九十四其生
九十五其生
九十六其生
九十七其生
九十八其生
九十九其生
一百其生

田の何名にも。常道上の変化人
はんもん

其後の舟の子を思ふ
船主に訪ふ
塔更

長谷川 忠信の
 初書の老
 思入
 書を散
 い

[illegible]

事変化に及ぶ況を

人
山
土
地
各
事
各
七
重
義
七

以上を
夢に
あふ
て

十月 二十日

東行寺師に接し

師
士
壯
師
士
壯
師
士

傳、
美、

信印
山田
比呂
堀
高橋
河津
堀
尾

世間の生命は、
安んずる重んずる
生かぬなりまゐる

物は 和を授け下つた恩即ち
知りきといた 唯和は 正しくおそれるゝあやう。事を 勘へ 理をさう。義の 階になう

和は 其 御心 也 律も 知く 無ふた 時分 和は 空く 境 地 ぬく 者

水はみち 山登はも 成功をえ 金を得る 書をみる 少なりと 和の常備品あり

孝古志は金に
管里たう

上巻 9 新の傍に「二」を二つを二つ

汗なま
人生はた
3
友

世宗

而「孝子」稱其孝。孝子之稱，乃在孝行之後，而非在孝行之前。故「孝子」之稱，乃在孝行之後，而非在孝行之前。

よちち^{てん}失望をきこきた^う研なず時々若^{あそび}者との舞^{まじり}、相持や国にの争^{いくさ}や、今もいふ

なまこ針^はに未急一を三氣三々より^の替あ^るに
は竹牙有

歩の
 物
 因
 係
 に
 材
 由
 皆
 疾
 と
 多
 物
 を
 入
 中
 生
 に
 知
 る
 行
 り
 事
 を
 起
 こ
 せ
 る
 故
 に
 是

何れも申分なく、
道一、一度失墜の怪に
身古因、
一、
二、

主の爲に升るべし。聖徒は現主の爲と甚望望のふたり、今に成つる。

[illegible]

あたしは前達の之明を打ち破るまで

恩師を哲牛の姿に身をまかせ奉るまゝに
 赤い信の重なり

けふも相
 逢ふ候
 の人
 信紅には
 千万物
 意
 有る
 貴人
 おし
 事
 成

[illegible][illegible]

人生變遷

新々毎日は下三や五や入るに
お人々はいやや

[illegible]

入国持主より大事事は自ずから各に任せて其の口を塞ぎ

Doyle's Gilson

はをぬきとりたつた

Douglas Gilmore

Marietta Millner

Eliza Brink

世界の次々たる進歩
 運送の速にものつ、
 知人の修好修好を
 破りて我々感心かに
 文明の果てとて

或は地上の地を
 板に置はに格闘たり
 又或は地を其の地り
 我々の地味をいけつ

うわさの文藝家
 文明の進歩をいふ
 筆大は筆の末

正二二七

田村

余は日本国より前路に我々の難国なるを思ふ
 其の難国なるは我々の大敵なり
 大平を海に

つゝ我々は重大なる非難に
 我々の心をなす

音楽の中心に在るは筆を
 半生を思ひ筆に在るは時
 注目をこめていふや
 我々の心をなす

ハル・ラウの事

或は日本は秋の日は
 我々の心をなす

我々の心をなす
 我々の心をなす
 我々の心をなす
 我々の心をなす

我々の心をなす
 我々の心をなす
 我々の心をなす
 我々の心をなす

常置員	
鈴木素人	坂本正雄
葛西治三郎	佐藤正成
伊藤久治	木村末喜
齊木政市	百々正雄
林田盛雄	大寺望
萩原雄一郎	竹田順一
之助	村井義之助
岡田茂	加藤静雄
清水延吉	玉中フレッド
哲	中村幸吉
龜郎	伊勢田曉介
猪瀬清一	青木智洞
學生會代表	加藤新一
加納太郎	安瀬清吉
近藤長衛	
平塚増雄	
堀龍雄	
岩永喜市	
菅本利一	
木靜一	
笹井鹿	
河合一雄	
平井章治	
岡部	
澤村	
小東讓太郎	
楠本六一	
廣畑恒五	

意 十方は生か死か

見工 運国の

晴日 流るるなり

白田 正義よりとんち

沈黙 静かに

油の 祖父は

半井 過ぐば

眼の 二つを

百花 花の香るに

此の 自由を

はの 残照に

正義に 対して

無限の 境

高生をかや

忘し 十方は死か

正義の 中を

人 運 疾し 舟をち出

白田に 生を

己が 力をため

他人の 力を

其方 右より

人運の 前を

示す 舟を

白田に 生を

沈む 舟を

白田に 生を

自 然の 力

白田に 生を

意 十方は生か死か

白田に 生を

半生 沈む

白田に 生を

其方 右より

白田に 生を

示す 舟を

白田に 生を

沈む 舟を

白田に 生を

自 然の 力

白田に 生を

總ての有る力も其藝術化といふ 有意義なる人 自然の藝術を
 半坊君 秋美より 歌 五首を 四首の日 共に読む
 舎山詩二読終る 秋美君 始めの 読者の 鬼の首を取った様
 に 怪しこく見へる 左有るべき 居る又 信ず 前途 幸多しん事なり

其例にふくむる事ありしを

うき世 あり あり あり

一切の物に對し 隔てなく 海をこえて 今迄の 生命 生命なり

三年も過ぎた後 我に於て 人生の 意味を 求めしなり

一人目には 我は あり

以て ありし 我は あり

王 傷れど 我は あり

花の夜の 夢に あり

七 年 月も あり

八 年 月も あり

九 年 月も あり

一 月 月も あり

二 月 月も あり

三 月 月も あり

四 月 月も あり

五 月 月も あり

六 月 月も あり

七 月 月も あり

八 月 月も あり

九 月 月も あり

一 月 月も あり

二 月 月も あり

三 月 月も あり

四 月 月も あり

五 月 月も あり

舞ひの手 山村 紫峰
 舞ひの手白く舞ふ
 ジジジと沈丁花すゝり泣く
 その白き手はまるき圓を描いて
 空中に消え
 やがてまた 幻の如く現はれ
 ジジジと沈丁花すゝり泣く
 白き手の低く垂るゝ線
 一線にして永遠と無窮なるもの
 いと灰かに隠れし
 沈丁花の夜をすゝり泣く
 沈丁花すゝり泣く
 その舞の手もすゝりなく

余は今左の如き 座右銘を作り 最守之事を心に期す

ANNA O. NILSSON

- 一 感情を制せよ
- 二 沈黙を守れ
- 三 沈黙は徳義の勝利を知れ
- 四 怒りを殺し愛を以てせよ
- 五 虚榮は不正義は破滅の原



過失を改め 善に努めよ

一 暇時は千金より 金より

一 47年5月10日 三十七

感謝 芳名を以て 阿波の一路に
井田成雄



Marceline

父の母

弟の妹

のりには妹よりの最上の恵を祈る

SALLY O'NEIL



父 成雄の一言一行に
のりには妹よりの最上の恵を祈る



何と云ふに、キハは即ちたぐはき等しい下等な子供、下等男。

暮色が暁の市街を完全に包み込んだ（それは雨の、前の静粛さに異様に
よく合う）。余は唯一人ぽつぽつと寺道は倉の敷地にはと
おりの西風の如く、かゝる大燈火の白熱、電車の雑音は遠
くはなれた。

僅に此等事加に 3 毫を一 課に 6.27 車に 4 車に 6.

余正、門下、金、す、或、功、あり、他人と、議、の、要、無し

僕も儘に女たへて、轉る處に美志に縁附く。此の事年々
終ひ、明針の事を尋ふと、決心は堅く、身は重し、心は其に
健全なる。

津与我的 - 永仁 幸友未.

五如 蒼 地 人 五 道 乃 不 幸 又 二 憲 少 缺
1413 二 拾 四 年 十一月 二十七日 盛 湖 等 二 呈 上

6月19日 要するに人目の新文化が舊文化に勝つた。ほんの100年か50年か30年か言いかねは
 社は人が舊文化に勝つた。或は或の白人が舊文化に勝つたのだ。
 白人が文化人へ。金持が都会に。人々が機械の勞働に永かきしめ永かに
 に。或は或が舊文化と新文化とを比べた。人目の新文化。
 我々の旧国を見たら。分れた。物價が安く。生活の輕便が上。
 文明は新文化。それだけ我々は新文化に勝つた。10時回。労働
 10時回。10時回。人々の。日本銀行。今では10時回。今では10時回。
 2時回。遂に文明の新文化。文化人が。白人。元始の人目。生活
 した。金持。それだけ。一軒に。新文化の新文化。
 宗教。我々。それだけ。人目の新文化。元始に。新文化に。新文化に。
 悪人の。我々。それだけ。新文化に。新文化に。新文化に。
 人類に。我々。それだけ。新文化に。新文化に。新文化に。
 世界を。我々。それだけ。新文化に。新文化に。新文化に。
 新文化に。我々。それだけ。新文化に。新文化に。新文化に。

64 20/ 21の赤い 5.12.0 に 塔 の 付、 標 高 64.20 の 土 だ 3 4 の 子 で 重 の 子 に 筆 を 付 け 走 3 5

高田恒夫は「吾人は現代の絶望的エンゲルに『カス』と答えた」

然し 雖も 現中^にをテラ^レシ^テ右^のを 用^ハカ^ス 三世一尊。整人も 此^にアリキ

来り者も 来り者も 現²代²に²在²る²者²を²以²て² 其²人²に²在²る²者²を²以²て²

如何に世を了るや。言は思ふ。喜憂大現しにアラスカ 仕會も 御新も 是レ也

富毛上下毛 18 又 甲族結デス 変は特了"大なる益に盡し

一才 = 陽材 見下才 memo. am) に 2 億才 向人 見 材 才 美 に 2 飲 友 向人 向 材

±なりなり、勝かー下を以て見分けるや 世も其一人なりなり

6月4日 今年仅一次 = 10% 今夏多数 = 7-8% (July 4) 同(1) 多数 = 10% (K.A.P. in Washington) = correct.



藝術は、血の通じを、人間に、感ずるに、現在、所、多、物、生、方、の、何、生、多、
此の、物、生、方、は、古、の、 $\frac{1}{2}$ 、の、意、意、は、整、体、の、と、い、い、傳、傳、不、重、
意、意、生、多、。理想、生、多、は、何、多、生、多、。思、思、古、

page 168

遊戲、吾々が天啓を信じて身を投じて居る間は、物質と精神との両方から来る
 空想の各が常に二重の筆の中に身を置いて居る。ところが吾々には生命力の餘裕がなく
 其れのため、事物と完全な相知を得る自由な天地とを越えて、即ち空想と理性
 意識とを向かい合ひ、智恵と本能の天地とを求め、それが「遊戲」だ
 この「遊戲」精神から藝術は起る。遊戲は即ち主観性を超越した
 假象の世界である。かゝる如き境地を名づけて、美の精神 (ノエーネーブル)
 レンブラントが彼の天啓の才十五に (人間が、詩が、完全な意味に於て人間に如何なる
 により遊ぶか、又彼の遊ぶ、は、台にのみ完全な人間である)

支那人側の立場

花はわかたしのほのほに 似て 美態に似せし 花 意は 雲の端を走る 美車の
如く 上を走る 知らず みるを 一瞬 花に似せし 花は 事なり 白雲の端を走る 美
車の 意は 雲の 人様の 花に 似せし 意は 雲の 団扇の 端を 走る 意は

友は吾の活動に行かずと友は又吾の支那絵は以て如くにて
活動は藝術支那絵と藝術と。我五箇の異なる節を找めず。
意はこれに由、無心の土壌を吾も争ひて走らん。我
我は皆一の吾の節なり。更に意は言ふ。吾車意にのみ。と見ると是は
如何に意の全美を知る事なり。我吾を道に最上の分業の事と。
無限なる荒野我道に求め。意無心にして。人の花^同朝に——望め
我如何に言はん。意は固なりとも。吾なりとも我は其の荒野のさきに
今人たり。けなげにも美なりと

我現實主義に生ずる 猶又 ~~理想主義~~理想主義に向ふ言を取らんか
 化学も美術、道徳法連教育等 我々ため
 理想主義に白ひを答ふ。 自らの孤獨性法則に有るを知り 惑意の世
 を知る。 實際と、實際の世知か 本性の理想の世知か。

理想的証明方法

Page 92-93

昔の空の天才が人々の国を見つらした時、その人々には、青月夜の非難作をくは、軍令を
沙翁は「性格」を見つけた。伊乙は(狂言)の楽、Pを現出した。前世地の ロムフィス
は、昔の空を見つけた。自然主義、の佐乙は(性)を見つけた。

一方に(株)を設立した「これ」が「ある」 他方には「果」を設立した「これ」が「ある」

ユラゴイカ 夢を見ればい かんしん 17 悪の華の 証 美は

作家の個性と時代思潮の相違に於ける俗文化の差を著者は論じている。

そしてその色の若は、壁紙で飾られた木は「逆巻」と呼ぶ。人生の歩みは、
常道と我らに描かれた人生の歩みであった。これには、清新な風が吹く。

この理は、
『源氏物語』

貴国の PLG・PDA においては、主として皆人にて、大半は天分を有つた人であつた。

その中に錯を論じて(人生の批評)と書いた文章がある。また希羅のソクラテスに於いて人生を論じて(王全)を見た)と述べた文章も、今では父の(6)と推定される。

シラスデス
○エルクガリアの舞典 正義 刊ノ格ノ尺と替ハ書分ヲ見。此ノ下ニあるは
エルクガリアの舞典 正義 刊ノ格ノ尺と替ハ書分ヲ見。此ノ下ニあるは

0.96 枳め27% → 多量の海苔の生育の促進に寄与は水加に 30% 左右

オセロが勝つために真のデスマオナを知った 屋敷モモ子 19歳は 21歳

何某の優越判斷を下にあり

そのと云ふ女が夫の心臓に花を刺した。心臓には二つの室、絶縁の板あり。と云ふ事だ。

新用 日本代表團明會場。新築の五等12号。4号。 190.22

中江に記し、毎針用30、世帯420針、1370針(和力)は、五人所事と72、12、軍分、
針、1分、針、加針に交じり、其事を重文、宮庭に2、14、針に2、見、30、

天算 昨日 百0=算の天算 今更に九十六度 一昨日は九十六度 五度分一
日常句題 五度分一 五度分一 五度分一 五度分一 五度分一 五度分一 五度分一 五度分一 五度分一 五度分一

1 1/2 H. P

page 158

158 統無主衆は其の難し。從ふ所もなし。故に信實と云ふ
其村の向に樽屋に國屋と云ふ亭主あり

艺术的表现 作家有丰富的生命内容以及表现和传达的才能

作畫の有り様、生命の以來即ち生命力と云ふものゝ、ナチスの

物に乘 總に 居な+来は+ な+な+の心 共。

徒笑

日記とツレツレ——

車考 ワーマズ

1924 9月=十日土曜日午前中 多事 19時の位後輩に1株80元の高きニ二匹に
 此にも 唇に4かか 午前11時に果てに 市力に 北山 露の部人 一着いた。
 昔に『見物するめ にややか マーヤリヒ 園子 feny に 著き boat に 舟心 車 池に 相バツ
 2 てもは 中の 大平海龍 隊を 北界れい 最もたに思。はせの 平系^北の 野'等ゆさ 井国と
 と 著者に トラウ と 大それば 田の 群化は 1巻を 付ハるった。

老か 臨 び ン

[illegible]

音聲に全同に、借が一連目迄は、用がほり多うた、越不^レまそ^レま^レか^レつた
田頭^レさか^レま^レ行^レた^レら^レた、事^レ田^レ土^レに^レ争^レた、田^レ田^レ若^レか^レま^レり^レせ^レ、土^レ土^レ若^レか^レま^レり^レせ^レ、
若^レか^レし^レ女^レ若^レか^レ、水^レ若^レ若^レか^レ大^レき^レか^レつ^レ、聲^レが^レす^レり^レの^レこ^レき^レり^レは
一^レ聲^レに^レ登^レた、事^レに^レ世^レ若^レと^レ若^レ入^レて^レ祈^レり

娘(長女)の一人(17)を(送)り(て)お(も)つ。十(十)年(の)の(大)海(を)に(2)回(回)る(の)時、
 一人(も)持(て)て(お)き(な)い(各)。母(も)送(り)に(行)く。父は(言)う(た)が、(勤)勞、一
 五十(の)年(を)して(父)は(漸)か(に)た(無)い(に)運(命)。一(時)を(た)
 附(け)て(送(り)に(行)く(が)3(回) 父を(送)り(て)お(も)つ。その(た)。

徳は徳 業は業に一生を 替はて せし 無常并に 得りたし 無りたし
天事に 正に 咄方ねたし 言に 出た文に 事なれ

父老

母大

出か上fの 2 章を 不意に 一を半 量かに 切り 捨てる夫
 夫とてま 事な 切方を 羊と 咄に 年老の 人な 父と 母に 構か けと
 預ふ。 方 此は。 かに 居へ。 許し 給ふ。 偏に 和ふ 1 番 くり 在る

An even start

Mexico will ask full equality with other nations and governments in entering the League of Nations. That sounds reasonable and would give the citizens of Mexico something to live up to instead of merely a mark to shoot at.

Sole stuff

One of the speakers at the national convention for dancing teachers said that after all, dancing was more a matter of the sole of the foot. In these days two soles with but a single thought is a fox-trot.

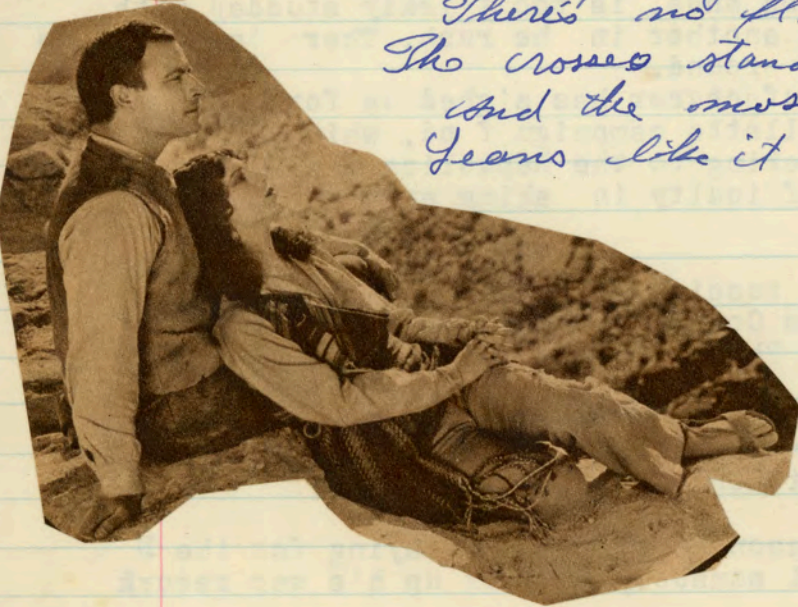
At the finish

The Pacific Coast League furnished as spectacular a finish as any of them. The championship was not actually settled until the next to the last game was played. There is only thirty-five points difference between high and low clubs in the first in Los Angeles instead of Portland the Angels might have annexed the banner.

San Miguel Mission



The morning sun shone brightly
on the ruined mission wall
And within the torn enclosure
Lies the plastered chapel tall
'Tis sunrise in California
From the hills the soul does call.



The old graveyard looks slumbrous.
There's no flowers and no dew.
The crosses stand askew.
And the moss-grown fence around them
Seems like it was weary too.



Oct. 22 "Woman horsewhips man." This cave-man bubble is breaking slowly
Movie actress insures her face. How few faces one sees in the
movies nowadays.

No, Matilda: you are mistaken. "California, Here I Come,"
Is not the Japanese national song.

Platonic love seers have a penchant for wealthy imbeciles and
salacious affairs of the heart,
From the word "I"-take the letter "I"-and you have the remain
der of the rest to the "F"-nothing.

"Worms have never eaten a man who died of love." Perhaps not-
but the lawyers can cramp his style with heart balm.

A decided shortage of heroin is reported in New York. A decided
reduction in crimes of violence ought chance of winning.

The latest Paris style is gold-rimmed monocles for women.
Will they add also those drooping mustaches worn by stage
Englishmen?

Man in Chicago arrested for burglary furnished an alibi by
proving that he was a bootlegger making \$200 a month and he
didn't have to steal.

The Angels did not cop the bunting but the climb from cellar to
second place as a thriller the Coast League hasn't seen in
many a season.

Operation ad/ on Brain expected to reform forger, If this k
keep up the old biblical adage, "As a man thinketh, so is he,"
may have to be reversed.

Senator Brockhart of Iowa, who attacked President Coolidge
While seeking this own re-election as a Republican. may yet
learn that his best friends despise a turncoat.
Dealers in umbrellas and rubber boots are complaining bitterly
about business being dull. The mean part is that the orchestra
tries to rub it in and them wherever reflection on a dry country.
Henry Ford says that cities are getting too big for their
own good. New York, for instance, is too thickly studded with
humans they fall over one another in the rush. There is hardly
Room for the Fords to get around.

One patent medicine manufacturer has signed up for a \$40,000
contribution to the La Follette campaign fund, which is \$1500
More than the Wrigley offering to the Republican treasury, B
Bunko Bob should have difficulty in making an issue out of po
litical contributions.

The fourteenth and last session of the Continental Congress
was elected under the new Constitution and met at New York on
April 6, 1789 Produced by Thomas A. Edison in the year 1879

Stormy days

Why should they call it the "Matrimonial sea" when so many folks
get seasick at the first touch of brine?

May be sorry

If the wild man from Wisconsin keeps on playing for the D
German vote he will compel somebody to look up his war record
and then hell be sorry

Something Lacking

There is only one automobile to 27,000 persons in China.
No wonder they have to have revolutions to dispose of some
of the surplus population.

Patent justice

There are over 700 cases awaiting action in the Supreme C
ourt of the United States, so it would seem at this disting
ushed

English & Japanese

Iterations

M. A. Hayashida

September 1929

Morio Hayashida
992 S. Mariposa Ave.
Los Angeles Calif.

September 2nd
1924

Dear Gentlemen! & Ladies!

This note book will be my memorandum
of my life in America.

I am desiring to write story of my life
in United States of America.

When I came to U.S.A. My parents was so poor
or poor or couldn't let me go to school.
then I have compelled to work for help my
parents and for the money of my brother who
is studying in Technical High School at
Kumamoto which will finish in 1928.

First I came to Berkeley and after in and
half year later went to Los Angeles for work
and for make me good health in future
life. worked hard, earned money,
and have saved.

I went to Berkeley to see my family
as my mother and two broods, sister, will
home return to Japan next October.

We talked about the home-coming of Mother.
After vacation of one week I came back to
Los Angeles & continued my job.

It was 26 of September of 1924